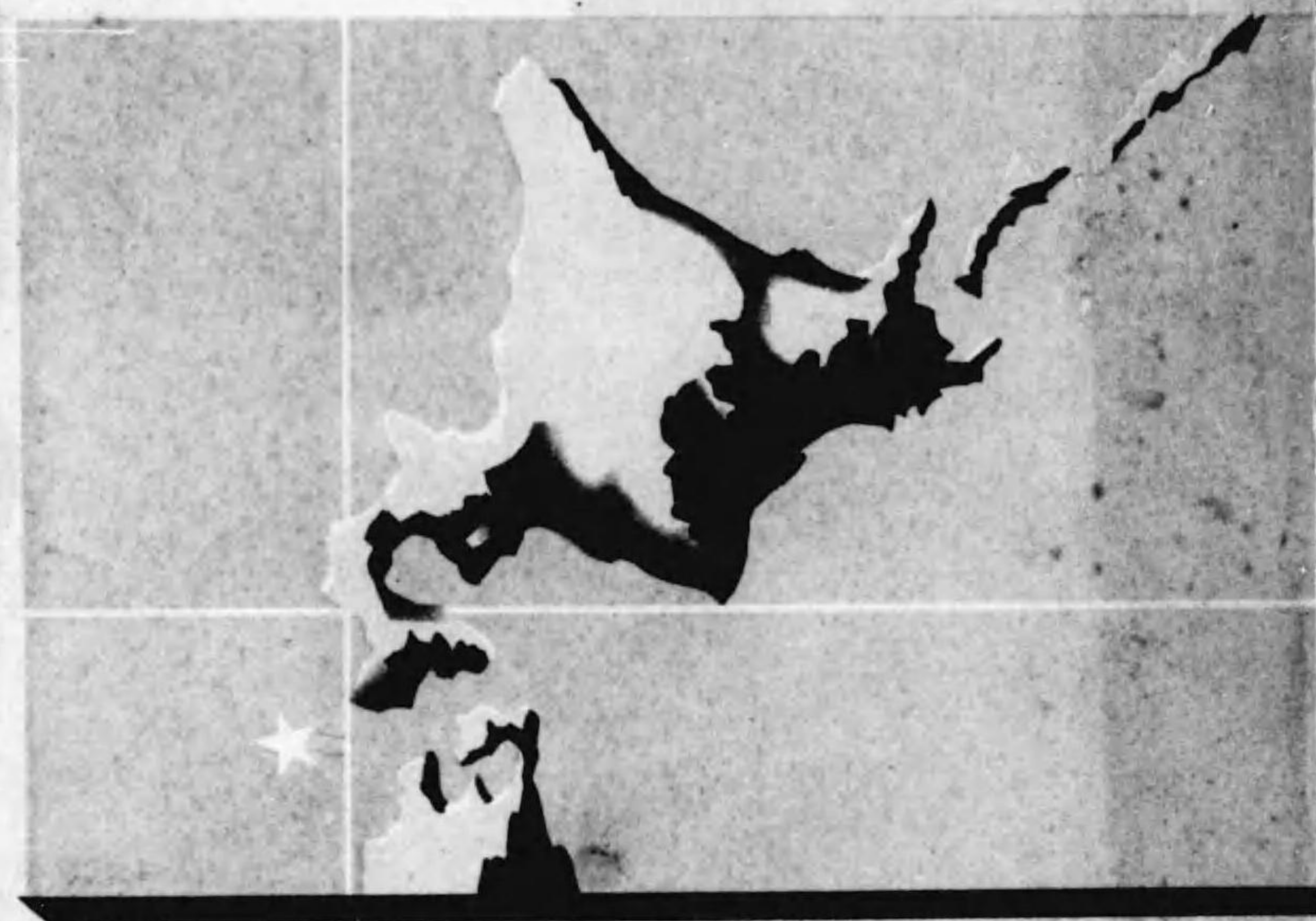


編廳道海北  
本讀局時  
輯二第



行發會育教合聯道海北

419

特233

722



始





特 233  
722



北海道廳編

局讀本

(第二輯)



社團  
法人 北海道聯合教育會





日本國、獨逸國及伊太利國間  
三國條約締結ニ關スル詔書

米國及英國ニ對スル宣戰ノ詔書



詔書

大義ヲ八紘ニ宣揚シ坤輿ヲ一字タラシムルハ實ニ皇祖皇宗ノ大訓ニシテ朕ガ夙夜眷々措カザル所ナリ而シテ今ヤ世局ハ其ノ騷亂底止スル所ヲ知ラズ人類ノ蒙ルベキ禍患亦將ニ測ルベカラザルモノアラントス朕ハ禍亂ノ戡定平和ノ克復ノ一日モ速ナランコトニ軫念極メテ切ナリ乃チ政府ニ命ジテ帝國ト其ノ意圖ヲ同ジクスル獨伊兩國トノ提攜協力ヲ議セシメ茲ニ三國間ニ於ケル條約ノ成立ヲ見タルハ朕ノ深ク懌ブ所ナリ  
惟フニ萬邦ヲシテ各々其ノ所ヲ得シメ兆民ヲシテ悉ク其ノ培ニ安ンゼシムルハ曠古ノ大業ニシテ前途甚ダ遠遠ナリ爾臣民益々國體ノ觀念ヲ明徹ニシ深ク謀リ遠ク慮リ協心戮力非常ノ時局ヲ克服シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼セヨ

御名 御璽

昭和十五年九月二十七日

各國務大臣副署

詔書

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有眾ニ示ス

朕茲ニ米國及英國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海將兵ハ全力ヲ奮テ交戰ニ從事シ朕カ百僚有司ハ勵精職務ヲ奉行シ朕カ眾庶ハ各其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力ヲ舉ケテ征戰ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ

抑東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與スルハ丕顯ナル皇祖考丕承ナル皇考ノ作述セル遠猷ニシテ朕カ奉々措カサル所而シテ列國トノ交誼ヲ篤クシ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ之亦帝國カ常ニ國交ノ要義ト爲ス所ナリ今ヤ不幸ニシテ米英兩國ト鬩端ヲ開クニ至ル洵ニ已ムヲ得サルモノアリ豈朕カ志ナラムヤ中華民國政府曩ニ帝國ノ真意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘテ東亞ノ平和ヲ攪亂シ遂ニ帝國ヲシテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ茲ニ四年有餘ヲ經タリ幸ニ國民政府更新スルアリ帝國ハ之ト善隣ノ誼ヲ結ヒ相提攜スルニ至レルモ重慶ニ殘存スル政權ハ米英ノ庇蔭ヲ恃ミテ兄弟尙未タ牆ニ相闚クヲ悛メス米英兩國ハ殘存



政權ヲ支援シテ東亞ノ禍亂ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞  
ウセムトス剩ヘ與國ヲ誘ヒ帝國ノ周邊ニ於テ武備ヲ増強シテ我ニ挑戰シ更ニ  
帝國ノ平和的通商ニ有ラユル妨害ヲ與ヘ遂ニ經濟斷交ヲ敢テシ帝國ノ生存ニ  
重大ナル脅威ヲ加フ朕ハ政府ヲシテ事態ヲ平和ノ裡ニ回復セシメムトシ隱忍  
久シキニ彌リタルモ彼ハ毫モ交讓ノ精神ナク徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメテ  
此ノ間却ツテ益、經濟上軍事上ノ脅威ヲ増大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス斯ノ  
如クニシテ推移セムカ東亞安定ニ關スル帝國積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ歸シ帝  
國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衛ノ爲蹶然起  
ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ

皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有眾ノ忠誠勇武ニ信倚シ祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ  
速ニ禍根ヲ芟除シテ東亞永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコト  
ヲ期ス

### 御名 御璽

昭和十六年十二月八日

各國務大臣副署

### 例言

皇國未曾有の時局に際會し、本道の負荷愈、重大を加へつゝあり。

この秋に方り我等道民は、先づ變轉極りなき時相の眞の姿とその流  
動の方向とに就き、正しき認識と深き理解とを有し、之が使命の達成に  
邁進して 上聖明に應へ奉らざるべからず。

本書は上述の趣旨により、主として本道青少年學徒の自覺と奮起と  
を要請せんがために編纂せるものなり。固より假さるるの時日少く  
且紙數に制限あるを以て、其の萬全を期し難かりしも、こは他日改版の  
際、修訂増補を加ふべし。

一、本書は便宜之を六章に分ちたるが、各章間相互の連關性について  
は、特に取扱者の意を留められんことを望む。

二、緊迫せる現下内外の諸情勢は所謂朝に夕を測られざるものあり。



本書の内容は力めて最近の資料に據りて叙述せりと雖も、取扱に際し時局の推移に適宜補訂の用意を要すべし。

三、本書の行文は平易簡明を旨とせるも往々内容上特に解説を要すべき點なしとせず、此等に就いては本廳思想對策研究會發行にかゝる「思想國防」に逐次掲げらるる解説を参照せられたし。

本書編纂に當り、文部省教學官小川義章氏、興亞院囑託長野朗氏、企畫院調査官竹本孫一氏、企畫院第一部第一課長美濃部洋次氏、食糧管理局事務官鶴川益男氏、東京帝國大學教授富塚清氏に於かれては公務多端に拘らず各専門の立場より分擔執筆を快諾せられ、特に小川教學官には終始編輯指導の勞をとられ今回稿全く成る、茲に各氏に對し深甚なる感謝の意を表す。

昭和十六年十一月

### 時局讀本 (第二輯) 目次

第一章 大東亞共榮圈の確立	一
一、世界史の轉換	一
二、東亞と歐米列強	六
三、支邦の過去と現在	九
四、東亞共榮圈の確立	四
五、日本の歴史的使命	五
第二章 高度國防國家の建設	元
一、歴史的使命の重大性	元
二、高度國防國家	四
三、列強と國防國家體制	四



四 皇國日本の國防國家の建設…………… 一五

第三章 經濟新體制…………… 三

一、國防國家體制と經濟…………… 三

二、國防經濟…………… 七

三、經濟新體制…………… 八

四、國民への要請…………… 九

第四章 食糧問題…………… 九

一、食糧問題と國防國家…………… 九

二、食糧増産…………… 一〇

三、供給確保…………… 一〇

四、配給—配給機構の整備…………… 一〇

五、消費—消費の規正…………… 一〇

六、大東亞共榮圈に於ける自給策確立…………… 一〇

第五章 科學日本の建設…………… 一三

一、科學の目標…………… 一三

二、科學の内容…………… 一五

三、科學の擔當者…………… 一八

四、文化に於ける科學の位置…………… 二二

五、科學日本建設の根柢…………… 二四

六、我が國民の科學的素質…………… 二九

七、科學日本建設の方策(一)…………… 三三

八、科學日本建設の方策(二)…………… 三六

九、結語…………… 四〇

第六章 思想戰…………… 四三

一、思想戰の意義と種々相…………… 四三

二、思想戰の闘争手段…………… 四五



三 思想戦と國民の心構……………一五

# 時局讀本 (第二輯)

## 第一章 大東亞共榮圈の確立

### 一、世界史の轉換

世界は今や歴史的に一大轉換期に際會し、前世紀より今世紀の初にかけて發展を續けた個人主義乃至自由主義を基調とした政治・經濟文化等は、數個の國家群の生成發展を基本とした政治・經濟文化等の創成に依つて、大轉回を見んとするの時機に迫つてゐるのである。皇國日本の戦ひつゝある支那事變も、盟邦獨伊の戦ひつゝある第二次歐洲戦争も、共に此の時代轉換のための世界史のうねりである。而して歐洲の戦火はポーランドより北歐に、更に西



部歐羅巴よりバルカン・近東へと擴大し、今や獨蘇の一大決戦にまで進展しており、皇國日本は滿洲事變に引續き、支那事變の勃發を見、今やその戦局は支那奥地より東南亞細亞に迄進展し、太平洋の波亦高きを思はしめる。世界は正に有史以來の大試煉期に直面してゐるのである。而してこの大動亂の渦中より皇國日本を中心として生れ出でんとしてゐるのが大東亞共榮圈である。昭和十五年九月、日獨伊三國同盟調印に際し、近衛首相は「世界歴史の現段階に於いて、世界を一單位とする組織の完成を期待することは不可能であるから、世界の諸民族が數個の共存共榮圈を形成することは必然の勢ひである。而して日本が東亞に於いて獨逸伊太利が歐洲に於いて、此の共榮圈を指導すべき立場に立つことは、歴史上より見るも、地理上より見るも、經濟上より見るも、亦必然の勢ひである。かゝる必然の傾向を阻まんとする所に、歐洲に於いて

は第二次歐洲大戰の勃發を見、東亞に於いては準戦時國際關係の緊張を見るに至つたと述べた。

今日まで世界を支配した歐米的世界秩序は、個人主義・自由主義世界觀に立つものであつた。元來個人主義・自由主義思想は、近世初頭に現はれ、爾來西歐文明の形成に著しく影響した世界觀であり、殊に十八世紀後半以降に於いては、政治・經濟・文化等の根本性格をなしたのである。而してその間にまた個人主義・自由主義思想は、時代の推移に伴なつて或は民主主義、或は資本主義、或は社會主義または侵略主義として發展したのである。かくの如く西歐に於いては、個人主義を基調とした制度及び思想の發展を見たが、元來個人主義・自由主義は、その自然情態に於いては常に利己主義・強食弱肉主義となつて發動するのである。そのことは個人の間、於いてもまた國家・民族の間に於いても同様である。殊に國家民



族の場合には、道義的拘制力を缺くがために、一國家、一民族による他國家及び他民族の征服侵略が盛に行はれる。西歐諸國家の近代史は、かゝる侵略争闘の繰返しを以て進展した。かくて西歐諸國家は相互に争闘を重ねてその間に興亡盛衰を見たのであるが、それと同時に西歐諸邦によるアフリカ、アジア、アメリカ更に南洋諸島等の侵略も徹底的に行はれた。かの大正三年より七年に互つて戦はれた第一次世界大戦はかかる争闘史の當然の歸結であつた。大戦の結果はヴェルサイユ體制の成立となり、英米佛を中心とした所謂自由主義世界秩序が形成せられると共に、戦敗國獨逸、奧太利は徹底的に壓迫を加へられ、飢餓線下に沈淪せしめられた。かくして大戦後に於いては、英米佛は世界の各地に廣大なる領土、植民地及び市場を獨占し、それ等の支配搾取の上に自國の繁榮と逸樂とを圖つたが、獨逸はもとより彼等の圈外に立つ國家民

族に對しては、政治的經濟的封鎖を以て、生存に必要な進出や自然的合理的なる成長發展を阻止したのである。かくて西歐に於いては所謂「持つ國」と「持たざる國」とが生じ、持たざる國をしてその生存の餘地なきことを嘆ぜしめ、東亞に於ては歐米の壓迫搾取に苦惱呻吟する國々を生ぜしめた。かかる世界秩序が不合理であり、正義人道に反することは言ふまでもないが、而も所謂自由主義國家群はこの不合理をば飽まで維持せんとした。併しかくの如き道義に悖る世界秩序は、今や合理的道義的世界秩序の建設を目指す國家群の成長發展により、崩壞の運命を辿り、之に代つて新しき秩序の建設が發展しつつある。東亞に於いては皇國日本が東亞共榮圈確立の主體として、西歐に於いては全體主義國家獨逸、伊太利等が西歐新秩序建設の擔當勢力として、舊秩序維持に狂奔する諸勢力の克服掃蕩に渾身の努力を續けてゐる。



八紘爲宇はわが肇國の大精神であり、世界に道義を治からしめ、萬邦をして一家の和親と共榮とを樂ましめ、全人類をして安居その志を達せしむることは、皇國日本の理想とする所である。昭和十五年九月、日獨伊三國同盟調印に當り、畏くも渙發せられた大詔の中に

萬邦ヲシテ各々其ノ所ヲ得シメ兆民ヲシテ悉ク其ノ堵ニ安ンゼシムル

と仰せられた。皇國日本の世界史的使命はこの聖詔に明らかに窺ひ奉ることが出来る。この御精神こそ、世界新秩序建設の理念でなくてはならない。

## 二、東亞と歐米列強

大東亞共榮圈の確立は世界新秩序の一環であり、またその基本

ともいふべきものであつて、これがために我が國は聖戰既に四箇年餘を閲し、東亞禍亂の張本たる蔣介石の抗日政權に對して、徹底的に膺懲掃滅の鐵鎚を加へてきた。しかしこの大業は單なる抗日政權の打倒のみでは達成せられない。周知の如く支那事變勃發以來、抗日政權を極力支援して我が國に對する焦土的抗戰を續けさせてきたのは英米蘇等の國々である。彼等は自己の利權の苗床たる支那の抵抗力を強化して、わが國の大陸進出を阻み、東亞に於ける自己の支配權を必死的に擁護せんとしてゐる。彼等の抗日政權の支援は支那の自由獨立のためではなく、むしろその反對に永久的隸屬化を圖るためであつて、彼等の傀儡となりて、英米依存と聯蘇容共を支柱とする抗日政權の存在は、支那を解放し救濟するものではなく、むしろその植民地化を増大するものである。従つて聖戰の大業は、拔本塞源には支那を政治的經濟的文化的



に壓迫し、植民地化してゐるこれ等の勢力の追放でなくてはならない。

隣邦支那に對する歐米諸國の侵略の歴史は、古くして而も根深いものがある。従つてその搾取の動脈は、老國支那の全身を貫いてその國家生活を貧困ならしめるのみでなく時々半身不隨症状をさへ惹起せしめた。

(一) イギリス 先づ英國について見よう。西歐諸邦の東亞への來襲は西紀十五世紀末に始まる。まづポルトガル・スペイン及びオランダを先驅者として、東亞諸邦及び南洋諸島への侵略及び通商が開始せられた。次いでイギリス・フランスがこれに加はり、爾後彼等は相互に植民地獲得の鬭争を重ねつゝ、東方諸邦の侵略を進めたのである。しかるにイギリスは、西歐に於いて漸次に國際的優位を占むることとなり、これに伴ひ東方に於ける植民地獲得

競争に於いても、他國を壓倒することゝなつた。かくてイギリスは十九世紀初頭、印度のムガル帝國を支配下におき、次いでマレ半島を奪取してこれ等を東亞及び南洋方面侵略の基地となし、その中葉には進んで支那沿海に迫つた。而して阿片戦争を挑發し、武力を以て支那を抑へ、一八四二年南京條約を結ばしめ、南支の要衝香港を奪つて、支那侵略の根據地となし、それと同時に廣東・廈門・福州・寧波・上海の五港に通商居住地を獲得して、中南支の經濟的侵略の據點としたのである。その後間もなく、アロウ號事件に端を發してイギリスは、フランスと聯合して太沽・天津を侵し、清朝の都北京に軍を進め、一八六〇年支那をして北京條約を結ばしめた。これによりイギリスは香港の對岸地區九龍半島を割取すると共に牛莊・芝罘・汕頭・臺南・瓊州・漢口・天津等を開港せしめて、北中支に於ける經濟的進出の據點としたのである。更にイギリスの支那侵



略は、ただ海岸線を通してばかりではなく、陸路よりも進められ、一九一二年には英藏條約により西藏がその支配下におかれた。

かくの如くイギリスの支那侵略は海陸兩方面より進められたが、それと同時に支那に於ける鐵道敷設權、鑛山採掘權をも收め、また借款の提供、關稅鹽稅の保管等により金融權を握り、經濟的侵略の基礎を確立したのである。更に侵略の手は文化の方面にも加へられ、イギリス系統の教會、學校、病院等は各地に設けられ、支那の民心獲得の具とすると共に多數の支那人留學生を本國に吸引し、また言論機關を支那において豊富なる資力と謀略とを以て、支那の言論界を指導し、一方親英の氣運を醸成すると共に他方排日の空氣をも造らせたのである。

かくの如くイギリスは、長年に互つて東亞及び支那の侵略を進め、今日の支那をして半植民地國たらしめたのが、支那に於ける利

權擁護のためには、常に東亞解放の指導勢力たる皇國日本と支那との提携を恐れて離間策を續けた。支那親日派の打倒、日貨ボイコット、排日運動等の背後には常にイギリスの魔手が動いてゐた。殊に昭和二年以降、英蔣の關係密となるやイギリスは蔣介石を財政的に援助すると共に排日の策謀をもなし、遂に今日の日支衝突を導いたのである。事變勃發後に於いては、或は法幣の援助により蔣介石の抗戰力を支持し、或は香港より武器を供給し、その通路が塞がるやビルマルートによつて、重慶政府に對して輸血を行つてゐる。

(二) ロシヤ 歐羅巴ロシヤが亞細亞の地に進出したのは、西紀一五七八年コサツク人の毛皮の利を求めて、ウラル山脈を越えたのに始まる。その後もロシヤ人はコサツク人を先驅として西比利亞の地を東進し、東方民族を征服し、十七世紀中葉には黑龍江の探險



を試み、その流域を占領することによつて清國軍と衝突した。一六八九年のネルチンスク條約、一七二七年のキアクタ條約により露清國境の劃定をなし、廣大なるシベリアの領土權を確立し、それと同時にキルギスコイカンド等の中央亞細亞を侵して、支那をば西方及び北方の兩面より脅かした。十八世紀中葉には罪囚をシベリアに流謫して土地の開拓に當らしめ、一八五九年の愛琿條約によりて黒龍江左岸地區を奪取し、また英佛對清國の北京條約に際しては、兩者の間を斡旋し、その報酬として沿海州一帯を割取した。而してここに海港ウラヂオストツクを建設して、東亞の大陸及び海洋の大侵略の根據地としたのである。かくてロシアの領土侵略野望は、神州日本にも向けられ、江戸時代末の外患交、到るの事態を現出せしめたのである。

かくの如く、帝政ロシアは三世紀の長きに互り、執拗に東亞侵略

を重ね、歐亞に跨がる大帝國を建設したが、これに満足することなく、明治以降に於いては、更に貪婪なる奪略の魔手を支那、朝鮮、日本に伸ばさんとした。

明治二十七八年戰役は、ロシアの朝鮮侵奪の危険の前に、これが安全確保につき日支見解を異にするより發生したのであるが、戦後わが國が清國より國防上の保證より遼東半島を得るや、ロシアは獨佛と語らひ、その還付を迫り、わが國がこれを容れるや、直に清國との間に密約を交はし、旅順、大連を租借して、海陸の軍事基地を構築し、東亞侵略の前哨地となし、同時に鐵道敷設及び鑛山採掘の利權をも收めて、滿洲の軍事的、經濟的經營を始めた。更に明治三十三年北清事變の勃發するや、これを好機として、滿洲各地に大兵を駐屯せしめ、その併合を圖つたのみでなく、接壤國、朝鮮をも覬覦した。ここにおいてわが國は、東亞の安全を期するために、明治三



十七八年干戈<sup>かんくわ</sup>を執つて起ち、かれの飽くなき東亞侵略の野望を打碎いたのである。

その後世界大戦の末期に、帝政ロシアは崩壊<sup>はうくわい</sup>し、ソヴィエト・ロシアの出現を見るに至つたが、その東方政策は、依然として侵略主義が繼承せられた。ただ武力侵略に代るに思想侵略の方法がとられたのみである。ソヴィエト・ロシアの支那に對する共產主義を以てする思想侵略は、大正八年より開始せられ、中國共產黨の組織を援助し、これを通じて急進的インテリ・都市労働者及び農民層を把<sup>とら</sup>へ、大正十三年には中國共產黨を基礎として孫逸仙の中國國民黨と提携することに成功した。かくて支那の赤化は著しく進んだが、昭和二年所謂國共合作の破綻<sup>はたん</sup>するに及んでは、中國共產黨は蘇聯の援助の下に共產軍を組織して、國民黨政府と鬭争し、到る所にソヴィエト地區を作り、遂には中華ソヴィエト政府を建設した。而

して中國共產黨はその後、國民黨の南京政府と連年戦を交へてゐたが、昭和十一年十二月十二日の西安事件により、抗日救國統一戦線の名の下に、再びこれと提携し、遂に蘆溝橋事件を惹起し、日支の全面的衝突にまで至らしめた。爾來ソヴィエト・ロシアは、蔣介石の抗日政權を軍事的經濟的に援助し、抗日が救國の唯一の方途なるかの如く宣傳して、支那民衆を欺瞞<sup>ぎまん</sup>獲得してゐる。かくの如く今日ロシアの赤色侵略主義は、日支相戦はしめて、蔣介石勢力の衰退を俟ち、支那に赤色支配を行はんとしてゐるのである。

(三)アメリカ合衆國 アメリカの東亞への進出は、阿片戦争を機會に、一八五四年支那に對して開港を迫り、領事の駐在<sup>ちゆうざい</sup>治外法權等を約して通商を開いたことに始まる。その後九年、わが嘉永六年にアメリカの水師提督ペリイが艦隊を率ゐて浦賀に來航し、わが國に通商を迫ると共に東亞進出の足場を求めたことは、國民のよく



記憶するところである。かくてアメリカの東亞への進出は漸次に繁きを加へたが、併し西歐列強に比較すれば著しく立遅れを免れなかつた。しかるにアメリカは、明治三十一年米亞交通の仲繼的要衝たるハワイを併合し、同時にスペインと戦つて南西太平洋上のフィリッピン諸島を奪略し、太平洋及び東亞への飛石的進攻基地を確保してから、頓に大陸支那に對する關心を高め、西歐諸邦の貪婪なる支那侵略に對して、機會均等門戶開放の主張を以て、著支那への進出を圖つた。西歐諸邦の支那進出が、武力的領土的であるに對し、アメリカは、平和的經濟的手段を以てし、従つて大なる抵抗をうくることなく進出し得たのであつた。かくてアメリカの砲彈に代へるに資本を以てする支那侵略は、年と共に發展し、或は巨額の貿易や資本投下、或は借款提供や幣制改革の援助等により、イギリスと共に支那の産業の實權を把握し、財政金融をも支

配するに至つたのである。事變前の支那の經濟は殆んど英米の制壓下におかれ、尨大なる國土と四億の民衆とはその搾取の對象とせられた。

なほアメリカの支那制壓はイギリスと同じく、文化的方面にも行はれ、多數の教會學校、病院等を設立し、また宣教師を派遣し、或は支那留學生を自國に招致して、支那民衆の心を把握し、思想文化のアメリカ化に努めて、經濟的進出を容易ならしめた。

前述の如くアメリカの過去一世紀に互る東亞進出は、要するに經濟的侵略であり、かくて今日支那に於ては、アメリカのドル勢力が廣く且深く根を下し、さなくとも貧困化せる支那より、莫大なる利潤が吸収せられてゐる。従つてアメリカは、日支の親善提携による、かかる權益の喪失を恐れて、これまで一再ならず離間策を講じた。蔣介石政權成立以降の支那に於ける排日抗日思想の激成



には、またアメリカの策動を見逃すことはできない。事變勃發以後、アメリカがイギリスと共に、蔣介石の抗日政權を支援し、策謀を以て皇軍の進撃を阻んだのみでなく、借款の供與、武器及び物資の補給をなし、重慶政權の抗戦力を長からしめ、皇國日本の東亞共榮圈の確立を遅延せしめてゐることは言ふまでもない。

(四) フランス 第二次歐洲大戰により一敗地に塗れ、ドイツの制壓下にあるフランスは、今日東亞に於ける歐米勢力の角逐の圏外におかれたが、しかし過去三世紀の間、西歐諸邦と東亞侵略を競つたのである。従つてフランスの既得權益なるものは、領土的にまた經濟的に東亞の各地に残存してゐる。十九世紀の中葉以降、イギリスの支那に對する進攻に際しては、フランスは常にこれに追隨し、或はこれと協同して市場の獲得、通商の利を收めた。これより先、十八世紀の中頃より十九世紀の初頭にかけて、フランスはイギ

リスと印度を争つて失敗し、これが補填の地を求めたが、一八六二年武力を以て越南地方の侵略を進め、遂に一八八五年の天津條約により、東京交趾支那、安南、カムボジア等の支配權を獲得し、その後ラオスを收め、シヤムよりメコン河東の地を割取して、今日のフランス領印度支那を建設した。かくてフランスはこの地を根據として東亞諸邦に侵略の手を擴げたが、その好餌は支那であつた。今日フランスの支那に有する權益は、かくして築かれ、領土割取、貿易、投資、借款、供與等により、尠からざる利を吸収してゐる。支那事變が勃發するや、フランスは追隨し、抗日政權を援助し、我が國に對して露骨なる敵性を示したことはない。

### 三、支那の過去と現在

以上に述べた如く、歐米の東亞、殊に支那に對する侵略の歴史は



古く、またその支配力は徹底してゐる。かかる長年の侵略に對し、支那は勿論無抵抗にこれを甘受したのではない。清朝末期、國政の弛緩は國力の疲弊を來し、ここに歐米諸邦に侵略の機會を與へたのであるが、清朝にありては、或は變法自強の國政改革により國力を増強し、或は排外政策の實行により、國權の恢復を企圖したのである。しかしながら保守退嬰、獨善尊大の民風は容易に革まらず、その方策は失敗し、却つて列強諸邦の抑壓を強めた。而して外力の壓迫は、ここに支那國民の一部に覺醒を促し、孫文を指導者とする滅滿興漢、國權恢復の革命運動を生起せしめ、その結果は清朝崩壞して、中華民國の出現を見た。しかしながら民國支那の誕生後數年間は、確固たる政治的統一權力なく、軍閥は權を争つて私闘を重ね、土匪その間に蜂起して掠奪を恣にし、土豪劣紳また土民の搾取に耽つて私利を逞しうし、國勢は益々疲弊窮迫に陥つたのであ

る。

第一次世界大戰後、歐米列強の抑壓は支那に集中したが、これは支那民衆を驅りて激烈なる排外運動に走らしめた。加ふるにコミンテルンの策動があり、民衆は盲目的暴力的に外國利權の回收を圖つた。かくて暴動は廣東・香港・上海・漢口・北京等に及び、諸外國、殊に英國に對する排撃は深刻を極めた。

民族・民權・民生の三民主義を綱領とする中國國民黨は、かかる氣運に乗じ、巧に民衆の排外心の組織化につとめると共に、聯蘇容共政策を採用して國共合作を圖り、その援助により益々勢力を擴張した。大正十三年中國國民黨は、廣東の地に臨時政府を樹立し、その後國民革命軍を組織し、蔣介石を總司令とし、蘇聯の支援をうけて北方に割據する軍閥を征服し、遂に昭和二年民國統一の業を遂げ、南京に政府を確立したのである。しかるに蔣介石支配下の國民



黨政府は、蘇聯を退け英米に接近し、遠交近攻の策を以て排日をこ  
ととした。かくして昭和三年以降、排日侮日事件は頻發し、排日教  
育は軍民の間に徹底し、抗日宣傳も至る所に行はれた。昭和六年  
の滿洲事變はかかる排日の暴舉に端を發したが、わが國の正當な  
る處置によりて、遂に滿洲國の獨立となり、民族協和の王道樂土の  
建設を見たのである。しかるに蔣介石政府は、これに對して英米  
に縋り、國際聯盟を利用して、これが建設を妨害すると共に、支那民  
衆に反滿抗日の思想を注入し、日支の對立意識を益、激成した。か  
くて昭和十二年七月七日蘆溝橋事件は發生し、わが國の不擴大局  
地解決方針なりしにも拘はらず、蔣介石政府は日支争ふことを利  
とする諸外國の策謀に乗ぜられ、これを日支の全面的衝突にまで  
導いた。歴史的・地理的・民族的に親縁關係を有する日支が互に抗  
争することは、徒に歐米諸國をして漁夫の利を得せしむるもので

あり、殊に支那にとつては亡國的行動に外ならない。歐米の侵略  
に對して、東亞民族が共同の運命を有することに支那は速に開眼  
しなくてはならない。しかし今日なほ蔣介石政權は邊境重慶の  
地に據り、英米諸國の援助に依存し、打續く敗戦にも拘はらず、頑冥  
にも抵抗を繼續してゐる。これは蔣介石政權を維持する方法で  
はあり得ても、支那四億の民衆を救濟する所以ではない。長年に  
互り歐米の抑壓下に困窮した支那民衆は、蔣介石の無暴なる抗戰  
によりて、更に苦惱を倍加してゐる。それと同時に英米蘇の支援  
は支那をして益、植民地化への方向に走らしめてゐる。併し支那  
にありても具眼達識の士は、かかる事態が廳ては支那を滅亡に陥  
れるであらうことを悟り、殊にわが政府の數次の聲明によりて、わ  
が國の事變解決の眞意を諒解し、抗日的態度を放棄して、日本と提  
携することにより、支那の更生を圖らんとするに至つた。重慶政



府の指導者であつた汪精衛は、昭和十三年十二月重慶を脱出し、その後同志を結集して和平救國の運動を興し、昭和十五年三月三十日南京に新國民政府を樹立した。新政府は和平の實現を方策として、支那の諸勢力を統一し、わが國と協力して東亞永遠の平和及び新秩序の建設の任に當らんとしてゐる。東亞新秩序の建設には、支那が東亞民族共同の運命を認識し、歐米諸國の侵略より自らよく脱却せんとする意圖に眼醒めることが肝要であり、汪政府の成立は新秩序の建設へ一步を進めたものである。

#### 四 東亞共榮圈の確立

既述せし如く、東亞に於て廣大なる地域を占め、豊富なる資源を藏し、多數の人口を擁する支那は、長年に互つて歐米列強の侵略的となり、これがために常に外患内訌に禍ひせられ、延いては東亞

の平和は攪亂せられたのである。今日歐米列強の勢力は支那に於いて根深く錯綜して、その發展を緊縛し、國力の衰頹、民衆生活窮迫の禍根をなしてゐる。従つて東亞共榮圈の確立は、支那に於けるこれ等歐米的諸勢力の排除及びこれに寄生してその走狗となる抗日政權の潰滅でなくてはならない。

曾て孫文は、日本なくして東亞なしと述べた。過去一世紀に互り怒濤の如く押し迫つた歐米諸國の東亞侵略に對して、獨力よく巨岩の如く防波堤の役をなしたのは皇國日本である。もし日本なかりせば、支那の國家、支那四億の民衆は如何なる状態におかれたであらうか。今日の印度の運命は支那の運命であつたであらう。

皇國日本は、江戸時代末期に於て、他の東亞諸邦と同じく歐米諸國による侵略の危険に遭遇したが、しかし獨り能くこれを排除し、



明治維新を轉期として新なる國家體制を整へ、列強の侵略的野望の重圍の中に、富國強兵の策を講じ、國力を充實して東亞の安定勢力たるの基礎を築いた。しかして明治二十七八年戰役には清國を撃つて、東亞禍亂の内的原因を除き、明治三十七八年戰役には歐亞に跨がる強大國ロシアを破つて、東亞侵略の野望を打挫いた。わが國が當時世界の脅威たりしロシアをして一敗地に塗れしめたことは、西方諸勢力の東亞進攻に對する最初にして最大の反撃であり、またこれを扼止する劃期的第一歩であつた。久しく歐米諸國の壓迫下に呻吟してゐた東洋の諸國諸民族は、これによりて自信と力とを恢復し、その桎梏より脱却せんとする運動をさへおこした。かくてわが國は東洋の平和確保と東洋民族解放の指導勢力として、彼等より多大の希望と信頼とをかけられた。しかして明治の御代を通じて、急速なる國力の充實と國威の發揚とによ

つて、東洋に重きをなしたわが國は、大正の御代に於ける第一次世界大戰を経て、更に飛躍的發展を遂げ、東亞の雄邦より世界の最強國たるの地位に上つた。しかしわが國力の發展は、世界制覇を指す英米佛等の所謂自由主義國家群の喜ぶ所ではない。殊に東洋に莫大の權益を有する彼等としては、晏如たるを得なかつた。世界大戰後の英・佛・米等の外交政策は、平和愛好の美名の下に、一面戰敗國ドイツに徹底的重壓を加へて、その復興を防止したが、他面新興國日本の發展を阻止して、彼等の西歐支配及び東洋支配を強化せんとした。ヴェルサイユ會議・國際聯盟・ワシントン會議・九ヶ國條約・四ヶ國條約・ジュネブ會議・ロンドン會議・オッタハ會議等は、何れも自由主義國家群による日本の勢力増大の抑止、東亞に於ける優位の制限を企圖したものに外ならなかつた。かくしてわが國は、國運伸展の荷擔者たる軍備をば、英米それぞれの海軍力に比



して著しく劣位にまで縮少することを餘儀なくせられ、他面移住による國民の海外發展に對しては、門戶開放主義の唱導者アメリカ合衆國を始め、カナダ、濠洲への門戶は固く閉ざされた。それと同時に世界市場に於て、廉價優秀を誇つた日本の輸出商品は、自由貿易主義國家英・米の對日經濟壓迫政策のために、わが周邊國たるフィリッピン、蘭領印度、オーストラリア、英領印度等との自然的互助的貿易の自由なる途を塞がれた。加ふるに既に屢述べた如く、英・米・佛・蘇等の諸國は、支那に於ける彼等の立場の喪失を恐れ、日支の離間策を講じ、支那を指嗾して排日を行はしめ、わが大陸への進出を阻害した。

かくの如く皇國日本が東亞解放の指導國家として報いられたものは、實に光榮ある國際的孤立に外ならなかつた。わが國は永久に坐してその壓殺を待つか、起つて帝國主義的壓迫の桎梏を打

破するか、二者擇一の運命におかれた。しかるに隣邦支那は、かかる情勢下にあるわが國をくみし易しとし、歐米の勢力に依存して排日侮日の態度を強化し、わが國が血を以て贖ひし滿洲に於ける權益を侵犯し、滿洲事變を惹起し、ひいては今次の支那事變をも發生せしめたのである。

しかしながら歐米に對して齊しく東亞共同の運命を擔ふ日支兩國が敵對關係にあることは、不自然であり、東亞の一大悲慘事である。況してその一半の否主たる原因が歐米の帝國主義的侵略の策謀にあるにおいてをやである。わが國は支那の抗日の迷夢を醒まさねばならない。抗日支那は過去一世紀に互る歐米の飽くなき支那侵略の歴史を顧みて、政治的經濟的に奴隸化されてゐる現情を認識すると共に、皇國日本が西力の東漸に對して、如何に東洋諸國・諸民族のために苦闘したかを諒解しなければならぬ。



日支兩國は唇齒輔車の關係にあり、唇破れて齒寒しの共同運命を有する。従つて皇國日本の道義的精神は、隣邦支那が歐米の搾取の對象となり、金權支配の植民地化することも、また赤化により破壊攪亂せられることも絶対に耐え忍ぶことは出来ない。更にわが國の生命自衛の本能は、支那が歐米の勢力圏に墮し、わが國に對する帝國主義的進攻の基地となることを絶対に容認することは出来ない。わが國は蔣介石の抗日政權を潰滅すると共に汪精衛の和平建國政權の支那統一の業を支援し、日滿支相互に提携して東亞を歐米の攪亂より解放して共存共榮の樂土たらしめねばならない。昭和十三年十一月三日明治節の佳日にわが政府の發した聲明の中に

帝國の冀求する所は、東亞永遠の安定を確保すべき新秩序の建設に在り。今次征戰究極の目的亦此に存す。

この新秩序の建設は日滿支相携へ、政治・經濟・文化等各般に互に互助連環の關係を樹立するを以て根幹とし、東亞に於ける國際正義の確立・共同防共の達成、新文化の創造、經濟結合の實現を期するにあり。是れ實に東亞を安定し、世界の進運に寄與する所以なり。

と述べ、わが國の事變完遂の究極目的とする所が、東亞永遠の安定を確保すべき新秩序、即ち東亞共榮圈の建設にあり、しかしてその目的を達するために東亞に於ける國際正義の確立、共同防共の達成、新文化の創造及び經濟結合の實現といふ四つの原則を示したのである。

東亞に於ける國際正義の確立とは、わが肇國の大精神たる八紘爲宇の東亞への具現である。それは自由主義舊世界秩序の原理たる利己主義・侵略主義によるものでなく、和親共存の道義による



秩序の建設である。即ち東亞の諸國諸民族が各、その所を得、善隣友交相携へてその志を達し得る共榮の新なる秩序の確立である。従つてこれがためには歐米の政治的・經濟的・思想的侵略によつて抑壓せられてゐる東亞の現情は打破せられねばならない。東亞に於ける國際正義の確立は、東亞の歐米勢力の壓迫からの解放、東亞の自主性の回復を不可缺的條件とする。元來東亞の諸國諸民族は、人種的・地緣的・文化的に相互親近性を有する。かかる東亞が一體的に共存共榮の秩序を建設することは、極めて自然でありまた必然である。東亞共榮圈の確立こそ、獨り日本の世界史的使命であるのみでなく、齊しく東亞に位置する國々の協力すべき課題である。支那は全國民的に排日の意識を拂拭し、抗日の非を改めてわが國と提携して東亞共榮圈建設の分擔者として東亞の復興に協力せねばならない。

共同防共とは支那と共同して、赤色帝國主義のコミンテルンの勢力が東亞の天地に侵入し、或は存在することを防止絶滅せんとすることである。コミンテルンの害毒については後の思想戦の場合に述べるとして、支那はわが大正八年以來その思想的侵略をうけ國內を破壊攪亂せられた。東亞の平和を確保するためには日支は共に赤化の魔手を防がねばならない。

新文化の創造とは東亞に課せられた一つの大なる命題である。東亞の文化は四千年の歴史を有し、日本の固有文化を始め、儒教佛敎其他種々の深遠にして優秀なるものがある。しかるに西力の東漸に伴なひ、東亞は西歐文化の多くを受容した。その場合に自主性を缺き、自國の傳統に即して改容し轉釋する能力を缺いた國は文化の混亂とそれより起る弊害とに禍ひされた。これがために文化的隷屬とそれを通路として政治的・經濟的侵略をさへ招



いた。支那の如きはその最たるものであつた。しかるに東亞に混亂を齎らした西歐自由主義文化は、内包する缺陷によりて今や西歐に於いてすら崩壊せんとしてゐる。古來文化精神について西洋と東洋とは、性格的に異なり、狩獵的と農耕的、抗爭的と平和的、主我的と没我的、理知的と道義的、分析的と綜合的、唯物的と精神的といふが如くに對蹠的であつた。従つて科學や技術の如きは西洋の長とした所であり、東洋に先んじてよくこれを發達せしめた。わが國は、古來東洋文化の粹とするところをよく保存發展せしめたが、明治以降に於いては西洋文化の長とする科學技術及びその他のものを攝取して東西に互り仰視さるべき文化を形成した。新文化の創造は單なる歐米文化への追隨でもなく、また東洋固有文化への停滯であつてもならない。肇國の精神により兩者を止揚した現在わが國のもつ文化の地盤の上に立つてこそ始めて新

しい文化は生まれるであらう。

經濟結合の實現とは、支那に於ける從來の英米の經濟的搾取に、日本がとつて代るのではなく、日支平等の原則に立ち、資源資本、技術等に關して有無補足し、兩國民の經濟的利益を促進する互助連環の經濟體制を樹立することである。即ちわが國の傳統精神たる共存共榮の原則を東亞の地に實現し、日支五億の國民の生活の安定と向上とを圖らんとするものである。これまで支那の經濟は歐米の侵略によつて荒廢せしめられ、國力は衰微し、民衆の生活は極度に低下せしめられた。かかる情態は改善せられねばならぬ。のみならず現代の世界經濟の趨向は、自給自足の廣域經濟圏の形成を必須ならしめてゐる。即ち一つ一つの國が經濟單位となり自由貿易を行つてゐた時代は過ぎて、數個の國家が集まつて一つの廣域經濟單位を形成し、世界經濟の分節をつくる必然に迫



られてゐる。かかる趨勢に照らして日支の經濟結合は必要でありまた必然である。大東亞共榮圈は、經濟的には日・滿・支を樞軸とし、更に東南アジア及び南洋諸島を包含したものでなくてはならない。指導力を有するわが國が中心となり、かかる自給自足の經濟圈を確立することによつて、東亞の復興は可能となるであらう。

### 五、日本の歴史的使命

皇國日本の歴史的使命は大東亞共榮圈の確立にある。即ち東亞の復興であり興隆であり東亞各民族の解放である。そのためには前途幾多の困難があり多くの時日と努力とを要するであらう。わが國は如何なる障害をも突破してこれを達成せしめねばならない。日本は國防的地理的に見ても、また歴史的文化的に見ても、政治的經濟的立場からもこの大使命を負荷するやうに運命

づけられてゐる。

世界史的に見れば、滿洲事變は東亞の解放と自由主義舊世界秩序崩壞の第一歩であり、支那事變と第二次歐洲大戰の勃發とはその巨大なる第二歩である。世界の各地に多くの領土・植民地・半植民地を有し、暴壓と搾取とを重ねて來た自由主義國家群の舊世界秩序は今や潰滅の一途を辿らんとし、これに代つて西歐に於ては獨伊を中心とした新秩序が生れんとし、東亞に於ては日本の指導の下に大東亞共榮圈が建設せられつゝある。しかし舊世界秩序に利己的な存在と繁榮とを託してゐた國家群は、かかる秩序の誕生を極力防止せんとし、あらゆる畫策を以て妨害を試みてゐる。わが南方に横たはるアメリカ領・イギリス領・蘭領印度より重慶に通ずる所謂A B C D對日包圍線の成立は、わが國の東亞共榮圈の建設をば武力的經濟的に抑止せんとしたものに外ならない。今



わが國を繞る諸國家は對日經濟封鎖の舉に出て生存をすら脅かやさんとする態勢を示してゐる。

世界は今轉換期にある。東亞共榮圈は確立されねばならない。しかしてその任に當る皇國日本は敵性國家に取圍まれて未曾有の危局に面してゐる。あらゆる障害を突破して事變を完遂し、大東亞共榮圈を確立しうるか否かは、實に皇國の運命の岐れるところである。皇國日本の全國民は、自己に課せられた使命の重大なることを自覺し、一致團結して聖業の達成に邁進せねばならぬ。

## 第二章 高度國防國家の建設

### 一、歴史的使命の重大性

皇國日本は肇國の大精神に基づく大東亞共榮圈の確立のために、支那の抗日政權及び背後にありてこれを軍事的經濟的に極力支援しつゝある英米その他の敵性國家と戦ひつゝあるが、聖戦すでに四ヶ年餘を経過し、忠誠勇武なる皇軍將士の陸海空に互る奮闘と一億國民の舉國一致的銃後活動とによりて著しく戦果を擴大し、重慶政權の抗戦力を著しく低下せしめたが、しかし未だ俄かにその最後の潰滅は期待するを得ない。重慶政權の弱化はわが敵性國家の支援を益熾烈ならしめ、所謂A B C D線の對日攻勢の包圍陣をさへ形成せしむるに至つた。今やわが國は長期戦の段



階に突入したのみでなく、未曾有の危局に當面してゐるのである。肇國以來わが國は對外的に實に五度大いなる國難に遭遇したのである。而してその第一は元の襲來であつた。元は東亞の天地を席捲し、その餘勢を驅つて文永及び弘安の兩度に互つて我が國を襲つたが、殊に弘安四年の場合には艦艦一千餘艘、將兵十餘萬の大軍を以てわが西邊の地を侵したのである。當時のわが國は實に累卵の危き運命におかれた。しかしながら龜山上皇の御身を以て國難に代らんとし給ひし叡慮を畏み、膽喪の如き時宗は一身を抛つて起ち、全國の將士は奮起し、國民悉く愛國の精神に燃えて後援し、上下老幼男女舉國一致してこれに當り、元の大軍を殲滅して、よく國難を退け得たのである。次は江戸時代末に於ける歐米諸國の東亞侵略に對する危機である。英・佛・露米等の我が國への壓迫は苛重を極め、殊にイギリスの如きは産業革命を遂行して既

に百年を經過し、發達したる近代的産業を背景とし、進歩したる近代的武器を頼みとし、東亞諸國を侵略割取してわが國に迫つたのである。當時のわが國は國力の分散したる封建的割據制下にあつて、かかる絶大なる勢力の壓迫に對してはその存在を全うし得べくもない情態であつた。これに對してわが國は王政復古の大業を成就せしめ、封建的割據を打破して天皇御親政のもとに舉國一致の體制を確立して外敵に侵略の餘地なからしめ、國難を脱却したのである。第三は明治二十七八年戰役、第四は明治三十七八年戰役の場合である。一は東洋の大國清國を相手とし、他は歐亞に跨がる強大國ロシアを敵手とし、當時のわが國としては國家の存亡を賭した國難であつた。しかし兩戰役とも戰線銃後上下一丸となつて勇戰奮闘し、輝かしき大勝を博し、轉禍爲福却つてわが國運の目覺ましき發展を將來したのである。しかして第五の國



難は現在われわれの當面する危局である。現在の危局はこれまでの國難の何れに比しても勝るとも劣らざるものであり、文字通り曠古の大國難である。戦費のみを比較しても二十七八年戦役には二億圓、三十七八年戦役には十七億數千萬圓、第一次世界大戦には十六億圓を要したが、今次支那事變は今日既に二百數十億圓に達してゐるのである。このことは支那事變のもつ幅の廣さと奥行の深さを象徴するものであつて、事變の完遂、大東亞共榮圈の確立は東亞諸國諸民族に對する英米の搾取劫略よりの解放を前提とし、従つて彼等による執拗なる牽制や防害及び反噬があるからである。しかして既に述べた如く今日わが國の周邊にはアメリカ合衆國を指導者としてイギリス、蘭領印度、重慶政權の軍事的經濟的連繫が結成せられ、わが事變完遂を阻害するのみでなく、皇國日本の權威及び存在をも損傷せんとする對日攻勢包圍陣の策

動を見るに至つてゐる。皇國日本が歴史的使命たる支那事變の完遂、大東亞共榮圈の確立のために、今日のまた今後起り得る幾多の重疊する障害をよく突破し得るか否かは、實にわが國運隆替の岐れる所であり、一億國民は萬難を排して聖業の達成に決死邁進しなければならぬ。これがために必要なのは高度國防國家の建設である。

## 二、高度國防國家

高度國防國家とは國家のあらゆる機能と國民のあらゆる性能とを國防目的に向かつて一元的有機的に集結し、隨時隨所に國家の總力をば最高度に發揮し得るが如き體制の國家である。かかる國家の完成には固より愛國心による國民の一致團結が必要である。しかし高度國防國家は單にそれのみでは成就しない。國



家の凡てが國家目的から科學的に考量せられ組織的計畫的に整備せられることによつて始めて完成せられるのである。周知の如く現代國家間の戦争は單に武力對武力の範圍に止らず、政治・經濟思想・科學等の範圍にまで擴大せられ、所謂國家總力戰の形態をとる。武力戰に必要とする戰車・飛行機・艦船その他の兵器は優れたる科學及び技術を前提とすると同時に、これ等の十分なる準備と莫大なる消耗とは擴大せられたる生産力や豊富なる資材を必要とする。また戦争に於いては戰線・銃後をとはず、一般に旺盛なる戰鬪意志・鞏固なる必勝信念をもつことは勿論、國民精神が昂揚せられ、他の何物によつてもその統一の攪亂せられない精神的思想的裝備を必要とする。更に戰時にありては政治が國家の種々の組織や機能をあげて對内的並に對外的に全能力を最大限度に發揮するやうに運用されなくては戦争の遂行は全きを期するこ

とが出来ない。かくの如く現代の戦争は武力はもとより科學力・經濟力・思想力及び政治力等によりて戰はれ、従つて戰線は銃後に緊密に連なり、銃後と戰線とは一體關係となつてゐる。加ふるに今日航空機の發達は戰線の背後數百里の地帯をも戰場と化し、國民全體が國土防衛の戰士たらざるを得ないのである。國家總力戰・廣義の國民皆兵が今日の戦争形態である。従つてかかる戦ひを戦ひ抜くためには國家の總力が集結せられ、戦争目的に向かつて最高度に發揮せられねばならない。戦争の勝敗は今日では一に繋りて國家の總力發揮の如何にあるといふことが出来る。

高度國防國家はかかる認識から要請せられた國家體制であり、所謂國家總力戰體制である。かかる體制の完否は實に一國の運命を決するものであつて、その惨ましき實例は周知の如く第一次世界大戰に於けるドイツであつた。ドイツは大戦前に武力戰に



ついでには用意する所があつたが、經濟及び思想方面に關して準備を缺き、従つて武力戰に於いてはその最後に至るまで敵國を占據してゐたのであるが、經濟戰に於いては封鎖孤立せしめられて軍需品はもとより日常生活品の窮乏を來たし、また思想戰に於いては國內の共產主義者及び社會民主主義者の策動によりて思想的分裂を生じ國論の統一を缺くこととなり、加ふるに英米の宣傳謀略に災ひされて國民思想の混亂を惹起し、かくて經濟思想の兩方面より戰爭體形は壞れ、國民は戰意を喪失し、輝かしき武力戰の勝利を泥土に委して敗北の苦汁を嘗めたのである。かくの如く現代戰爭の勝敗はひとり武力のみでなく、經濟思想その他國家のあらゆる力の合成的結果によりて決定せられ、戰爭は國家の總力戰の體制と體制との戰ひとなるのである。従つて高度の國防國家體制を完成して軍備が充實し、政治・經濟思想・科學等が整備動員せ

られ、國民奉公の赤誠が組織化せられ訓練せられてゐる國家の前には、しからざる國家は到底敵すべくもないのである。

### 三、列強と國防國家體制

國家が自己の存續發展を期するため、外敵の攻撃に對して常に自己防衛するの軍備及びその他の手段を用意してゐることはいふまでもない。この意味に於いて何れの國家も國防國家であるといふことが出来る。しかして所謂平和時と雖も各國家間には外交・經濟思想等の分野に於いては武器なき戰ひが行はれる。即ち外交に於いて相手國の國力發展に對する防害或は牽制の如き、經濟に於いて資源原料市場等の獲得競争や通商貿易の制限及び禁止の如き、また思想に於いて他國の國民思想の攪亂や隸屬意識の注入の如きは何れも武器なき戰ひである。かくの如く戰時



平時の別なく國家間には色々の戦ひが行はれ、かかる戦ひに對しては各國家とも意識するとせざるとに拘はりなく不完の別は認められるが、本能的に何等かの程度の國防國家體制はつくられてゐる。かかることなくしては國家は滅亡して存續し得ないからである。今次歐洲大戰に於いてフランスが徹底的敗北を喫した時に、佛英獨の國防國家の建設に對して、フランスは準備をしてゐなかつたのみならず研究すらもしなかつた。イギリスは研究はしてゐたが準備をしてゐなかつた。ドイツは研究をし準備をし且實行をしてゐたといふ批評あつたが、これは意識的な計畫的な強化された高度國防國家の建設が如何に戦争の勝負を決するものなるかを示したものである。

イギリスは第一次世界大戰後尨大なる領土と優勢なる海軍力とを背景として世界を制壓したが、國內にあつては傳統的な二大

政黨制が崩壊して小黨分立し、また自治領に對する英本國の優越的地位を喪失し、國力の集中統一を缺くこととなり、對外的には國際聯盟の主軸となり老獯なる外交により自由主義國家群を頤使して新興諸國家の擡頭を牽制することによりて世界の現情を維持し、しかして自國の優越的地位を相對的に確保して來たが、近代の意味の高度國防國家の建設にはドイツに比して著しく立遅れた。漸く先のポールドウイン内閣に至つて大英帝國國防大學を總理大臣の下に設けて國防の基本問題その他に關する研究を始め、また各種の調査機關委員會等を設置して國防の研究調査を進めたが國防國家建設の具體案の實施にまでは至らなかつた。昭和十四年三月始めて徴兵制度の實施せられることとなり、同年八月には國防全權法案が議會を通過し、その後急速度に高度國防國家の建設が大規模に進められてゐる。しかしイギリスが支援を



誓つたポーランドは既に滅亡し、オランダ・ベルギーは征服せられ、フランスも亦徹底的敗北の悲運におかれてゐる。

フランスは第一次世界大戦後、戦争よりうけた瘡痕の回復と戦勝の光榮に幻惑せられた人心の弛緩とのため、多難なる國歩を進めたが、對外的には國際聯盟に頼りて漸く世界的優位を保つたに過ぎなかつた。政治は小黨分立して徒らに政權を争ひ内閣は屢、交迭して安定を缺き、國民は平和の安易に馴れて儉安奢侈の風に流れて國防の如きは顧みるものなきの情態であつた。殊に昭和十一年共産黨及び急進社會黨等の左翼政黨の所謂人民戰線諸派の手に政權が歸し、ブルム内閣が成立し、社會主義的な變革的政策を實行するに及んで、資本は海外に逃避し、爲替相場は下落し、産業は沈滞し、労働者はストライキに狂奔し、政治・社會・經濟の各方面に大混亂を生じたのである。政局は混迷し、國務と國防との緊密

なる連絡は失はれたのである。フランスの敗北は昭和十五年六月二十七日コンピエーヌの森の休戰條約の日に決したのでない。マヂノ線突破の時、またはパリ陥落の時に運命づけられたのでもなく、實に昭和十一年三月七日ドイツ軍三萬がラインランド非武装地帯に進駐し、これに對して時のフランス政府が國內混亂に禍ひせられて反撃を決意し得なかつた瞬間に決定せられたのである。政治家の内争、經濟運営の非國家性、労働者の階級的利己主義、軍備の不足、無責任なる評論の横行、國民生活の頹廢等が今日のフランスの運命を決定したのである。

ドイツは第一次世界大戦に於て慘憺たる敗北を喫し、工業都市は荒廢し、農村は疲弊し、莫大の賠償金は課せられ、軍備は最少限度に制限せられ、その復興の如きは想像することすら不可能な情態であつた。しかるに昭和六年一月ヒトラー政權が確立するや、事



態は全く根本的に變革せられた。ヒトラー治下のナチス・ドイツは「國防なければ國家なし、バターよりも大砲をとなし、ひとり軍備の充實のみならず國內諸般の制度、機構及び國民生活の凡てをば國防目的に向かつて革新したのである。ナチス・ドイツは先づ社會民主黨、共產黨等を解消せしめてナチス一黨の獨裁的支配を確立し、十七の聯邦よりなる聯合國家を再編成して一つの中央集權的國家を形成し、社會主義、自由主義、民主主義思想を排撃克服して民族社會主義世界觀を確立普及して思想的統一を徹底し、更にユダヤ人を排斥して民族的純化を行つた。而してナチス世界觀に基づき、政治、教育、經濟、産業、勞働、農村、食糧、人口、保健等の諸問題について革新的政策を遂行した。殊にナチス世界觀による國民教育及び青少年訓練はドイツ精神を更生し、昂揚せしむること頗る大であつた。かくてドイツの國防國家體制は戰前既に鞏固に建設

せられてゐたのである。而も戰爭と共に種々の施策によつてこれは強化せられた。ヒトラー指導下のドイツが七年にして能く宿敵を電撃的に葬り、而して今や歐洲大陸をその制壓下においたのも決して偶然ではないのである。ドイツの大勝は優秀なる軍備及び民族協同體に對する國民の犠牲奉仕の精神の旺盛なることによるは勿論であるが、國家體制の國防的完成が決定的役割を演じたことを見逃すことは出来ない。

ドイツの盟邦イタリアは大正十一年十月ムツソリニがファッシストを率ゐてローマに進駐し政權を把握してから國防國家の建設を始めた。ムツソリニは凡てのものは國家の爲に存し、國家の外に何もものもなく、國家に反して何もものもないといふ信念から大戰後のイタリアの社會的、政治的混亂の禍根をなした社會主義、共產主義を排撃し、更に後には民主主義、自由主義をも退けてファ



ツシズム世界觀によりて國內の政治的思想的統一をなし、その獨裁制を確立し、熱烈なる祖國愛と徹底したる行動主義精神とを以て政治・經濟・教育等の改革を行ひ、青少年團を組織し訓練すると共に軍備を充實し、護國義勇軍の如きを組織してイタリアをば古代ローマの氣魄と雄圖とに目醒まし、國防國家の建設を全面的に遂行したのである。かくて昭和十一年にはイギリスの威嚇を退けてエチオピアを併呑し、今日ドイツと携へてイギリス、ロシアを敵として戦つてゐるのである。

ソヴィエト・ロシアは革命以來種々の國內不安を退けて世界革命といふ遠大なる目的の下に共產主義世界觀によりて國家體制を變革し、三回に亙る五ヶ年計畫によりて國防の基礎たる産業の發達を圖り、赤軍の強化、國民の體位向上、殊に青少年の訓練につとめた。大量の兵力や大型戰車、多數の飛行機等による機械化裝備

は世界の驚異とする所であり、世界の精銳ドイツの電撃的進攻に對して敗退はしてゐるが、併し強靱なる抵抗力を示してゐるのである。

最後に敵國アメリカは第一次世界大戰後イギリスと提携して他國を抑制することによりて國防的優位を維持して來たのであるが、所謂全體主義國家群の國力發展に脅威を覺え、豊富なる物資と巨大なる工業力とを背景として海軍軍備の如きは大西洋、太平洋同時作戰方針の下にワシントン條約、ロンドン條約の規定する保有量百二十六萬二千噸をば昭和十二年以來急速に擴張する計畫を立て、更に昭和十五年のスターク擴張案により昭和二十一年までに三百五十四萬噸に増強し、以て東西海洋の覇者たらんとしたのである。

かくの如く最近では世界各國とも夫々の原理と方法との下に



國防國家の建設に邁進してきた。

#### 四、皇國日本の國防國家の建設

此の間にありて盟邦獨伊との協力を愈緊密ならしめつゝ、抗日重慶政權及び自由主義國家群との戦ひを戦ひ抜き、東亞共榮圈を確立し、進んで世界の新秩序創造を積極的に指導せんが爲には、皇國自ら強靱にして卓拔せる高度國防國家の體制を完成しなければならぬことは言ふまでもない。

皇國日本が世界史轉換の主體として國防國家體制を更に高度化するについては種々の方策があり、支那事變發生以後政府は國民に對して多くを指示したのであるが、最も注目すべき且計畫的なるものとしては昭和十三年四月制定公布の國家總動員法、十五年八月一日政府發表の基本國策要綱である。國家總動員法は戦

時及び戦時に準ずべき事變の場合に際し國防目的達成の爲國の全力を最も有効に發揮せしむる様人的及び物的資源を統制運用するため制定せられたものであり、勞務、物資、資金、施設、事業、物價、出版物等について國防目的のために統制運用を企圖したものである。而してそれ等の多くは勅令として同法に基づき今日既に發動せられてゐる。例へば國民徵用令、賃金統制令、會社經理統制令、學校卒業生使用制限令、従業者移動防止令、價格等統制令、新聞紙等掲載制限令の如きはそれである。基本國策要綱はその後に相次いで發表せられた國土計畫設定要綱(九月二十四日)、日滿支經濟建設要綱(十月三日)、勤勞新體制確立要綱(十一月八日)、經濟新體制確立要綱(十二月七日)、人口政策確立要綱(十六年一月二十二日)、交通政策要綱(二月十四日)、財政金融基本方策(七月十一日)等の具體的政策の謂はば總論をなすもので、高度國防國家建設の基本綱領と見做



すことが出来る。

基本國策要綱は第一に皇國の國是を闡明し、第二に國是遂行に遺憾なき軍備の充實と外交の根幹を示し、第三に國內體制の刷新として國體の本義に基づく教學及び思想の刷新、その他政治・經濟・文化等あらゆる國家國民生活の領域に於ける刷新を要請したのである。

(一) 軍備の充實 重慶勢力を徹底的に潰滅し、世界一海軍國と誇稱する米英兩國を敵とし、敗退しつつあるとはいへ世界の陸軍國ソヴィエト・ロシアの脅威を背景にもつわが國としては、量質共に優秀なる軍備の充實は、わが國の存立及び國是遂行の基本條件である。今次の歐洲戰線に於ける英佛の敗北は軍備そのものに於ける致命的缺陷が重大なる原因をなしたのである。英國陸相ホアパーリシヤは「徵兵制は完全に行はれてゐる。しかし現在の問題

は形式よりも實である。余は登録せるすべての壯丁を徵集することは出来ない。何となればわれわれは彼等に必要なる裝備を持つてゐない。更に彼等を訓練する士官の數も足りない」と述べてゐる。またアンドレ・モーロアの「フランス敗れたり」の一節には「戰爭はフランスに關する限り開戦と同時に敗戦であつたといふことが出来る。何故にフランスは敗れたかといへば十分なる飛行機十分なる戰車十分なる高射砲を持つてゐなかつたからである。又さうした不足を補ふべき十分なる工場を持つてゐなかつたからである。更にまた英佛は陸軍が貧弱であり、且巨大なる人的並に物資資源を急速に活用すべき何等の機構をも持つてゐなかつたからである」と書かれてゐる。これは盟邦ドイツの電撃的進攻の前に英佛の國防國家體制が如何に無準備であり脆弱であつたかを語るものである。



わが國土は環太平洋の地域花彩列島中の大部分の島嶼を中心として形成せられており、北邊千島列島より南邊新南群島乃至南洋諸島に至るまでの延長は蜿蜒實に一萬軒に亘り、陸海を聯ねるその横幅に於いても決して狭くはない。かかる廣大なる地域と海域とがわが國の防衛區域である。しかも我が國を圍繞する海洋はかつては國土の安全を保證したが、今日は艦船の發達によりむしろ敵國襲來の絶好の通路と變じてゐる。また飛行機の發達による空域の支配はわが國土の防衛的條件を一變し、東京の如きはウラチオストツクより僅か二時間、大阪の如きはマニラから以てしても八時間の飛行距離にあり、わが國は全土殆ど敵國から空襲される危険に曝されることとなつてゐる。かくの如くわが國土のみについてもその國防範圍は陸海空に互り著しく廣大であり且複雑であるが、更に大東亞共榮圈建設の防衛範圍に至りては

一層擴大せられ、また錯雑性を帯びるのである。樺太國境を北端とし、蘇滿國境、抗日支那戰線、ビルマ國境に連なる一萬軒の長きに互る大陸國防線に加ふるに西南太平洋及び南洋に及ぶ遼大なる陸海空域國防圈が現在わが國の防衛範圍となつてゐるのである。而もその中には敵性國家アメリカのハワイ・ミッドウェイ・ウエーク・グアム・マニラを通ずる東亞侵略の戰略的背椎が食ひ入つており、またイギリスの東亞制壓の基地シンガポール及びダーウイン（オーストラリア）軍港を底邊として過去一世紀間支那制覇の中心據點であつた香港が匕首の如く懷深く刺突してゐる。大東亞共榮圈の確立にはかかる危険地帯の制壓、除去が絶對的に必要であり、これがためには強力なる軍備の充實を要することはいふまでもない。

わが國の軍備は過去國際情勢の變轉につれて伸縮する所があ



つたが、今日支那事變四ヶ年餘を戦ひながら、尙且ソヴィエト・ロシアに侵入するの機會を與へず、また英米の恫喝に屈することなく、毅然としてよく聖業達成の推進力となり無敵皇軍の名を保つてゐるのである。しかしながら元來軍備は相對的のものであり、今日わが國の軍備の優勢は必ずしも明日の優勢ではない。現在のアメリカが軍備擴充に狂奔してゐることは既に説いた所である。長期に亙る大東亞共榮圈の建設に進むわが國としては、列國の軍備の情況に應じてその擴充につとめて今日の優勢を絶對的に維持しなければならぬ。

軍備に於ける第一の要素は言ふまでもなく人である。兵員の多寡、その素質能力の良否は戦争の勝敗を決する重要要素である。これ今日國策として人口増加策、保健衛生體育施策等の強力に行はれる所以である。また教育による國民の智力徳性體力氣力等

の素質能力の鍊成が強度に要請せられる所以である。

而して近代戦の特長は軍備に於ける優秀なる科學的裝備を人的要素と同じに重要なものならしめてゐる。軍艦・飛行機・戦車・自動車・銃砲その他精巧兵器等の優秀多量の裝備によることなくしては戦勝を得ることは出来ない。

かくの如く軍備の充實には種々の要素があり、これ等は獨り政府のみよくし得るものもあるが、國民各自の日常生活の間にあつても育兒・保健・心身の修鍊等の如き之に貢獻し得るものがあり、従つて國民はかかる見地から自己の生活を規正し、日常生活そのものを軍備充實の一力たらしめねばならない。

(二) 國體の本義の透徹 高度國防國家建設のためには國家諸般の刷新を必要とするが、その基礎は國民各自が國體の本義に透徹することである。基本國策要綱には、内政の急務は國體の本義に基づ



き庶政を一新し國防國家體制の基礎を確立するにありとし、その第一に國體の本義に透徹する教學の刷新と相俟ち自我功利の思想を排し國家奉仕を第一義とする國民道德を確立すと述べてゐるが、政治經濟・教學・道德・生活等の國內態勢の根本的刷新は國民がよく國體の本義に透徹することによつて成就するのである。國體の本義に透徹するとはわが國の傳統的國家觀、世界觀に徹することである。物の見方、考へ方、感じ方、生活の仕方等をば肇國の大精神たる大業恢弘の翼賛に歸一せしめ挺身せしむることである。一億一心、萬民輔翼の國家態勢もこれによつて初めて鞏固に形成せられる。

國防國家の建設には國民の思想及び生活を統一的に嚮導する世界觀の確立徹底が必要であり、ドイツがナチス世界觀を民族指導の原理としたのも、またイタリアがファシズム世界觀を國家

革新の原理としたのも、更にソヴェト・ロシアがコンムニズム世界觀を革命の基本としたのもかかる見地からに外ならない。わが國は過去數十年間歐米の學術文化を移入したが、これに伴なひそれ等の基礎的思想たる個人主義、自由主義、唯物主義等の影響をうけたのみでなく、社會主義、共產主義の如きすら流入し、思想の混亂に禍ひせられた。しかし近年に至り國民自覺の昂揚するにつれてかかる思想は漸次に克服せられたが未だ全く拂拭せられたと見ることは出来ない。高度國防國家建設のためには個人主義、自由主義及びそれに連なる諸思想の殘滓を清掃しなくてはならない。

元來個人主義、自由主義の國家觀にあつては、國家の基礎は個人にあり、國家は個人の單なる機械的集合體であり、國家生活は個人の便宜のために營まれるものとし、國家そのものの生命、理想、尊嚴



性の如きは認めないか或は少くとも輕視するのである。従つて個人の價値は國家に優先するとの觀念より出發し、國家を個人の手段と見、個人の利益即ち國家の利益であり、國家の任務は個人の自由、個人の利益、個人の生命を擁護するにありとするのである。而してかかる國家觀のわが國への波及は國家と個人との間に罅隙を生ぜしめ、自我功利の思想の横行となり、遂にわが國本然の姿を見失はしめたのである。「國破れて山河あり」とは古人の言である。亡國の憐れなる姿を描いて餘りなきものである。しかし現代の戰爭に於いてはその間斷なき空爆と破壊力大なる砲撃とによつて國破れて山河すら變貌するに至つたのである。國家の存するなくして一日として個人の生活の安定なく、また幸福もあり得ないのである。人間は獨立自存せず、また獨立自存し得ない。獨立自存の人間といふが如きは觀念的に抽象化された存在であ

り、實在する人間ではない。實在する人間は歴史的國家的存在であつて、人間は具體的には國民である。われわれ國民は皇國の歴史的生命の中に生れ、それによつて哺育せられ、而してその發展を擔ひつゝ、死んでゆくのである。國民は國家に包含され、支持され、實在せしめられる。従つて國家が一義的存在であり、個人は國家に從屬し、その目的に對しては全力を擧げて奉仕しなければならない。個人は國家或は民族あつての個人であり、また國家或は民族のための個人であつて、個人の生活のあらゆる部面は國家に歸一しなければならぬ。皇國日本の主體は天皇にましまし、國民は天皇の御稜威に隨順歸一することによつて眞の人間たり得るのである。而して天皇の御稜威に隨順歸一することは天業恢弘の翼賛に挺身することであり、これは肇國以來の國民の傳統的國家觀であり、今日の國民の國家觀でなければならぬ。皇國史に



燦たる光芒を放つてゐる忠良賢哲の士の行績はかかる國家觀を身を以て敘述したものである。また今日傳誦せられて國民の心奥を深く動かしてゐる歌の

海行かば水漬くかばね山行かば草むすかばね大皇の邊にこそ  
死なめかへりみはせじ

けふよりはかへりみなくて大君の醜の御楯と出て立つ我は  
大君の爲には何か惜しからむ薩摩の瀬戸に身は沈むとも

等の如きは、生くるも之によつて生き、死するも之によつて死する傳統的國家觀を端的に表現したものに外ならない。しかしてこの天皇に隨順歸一し、國家奉仕を第一義とすることを國民の思想生活及び行動の根本理念とするところに國防國家體制の精神的基礎は作られるのである。今日英佛等の自由主義國家群の敗退は個人主義乃至自由主義國家觀の敗北でもある。われ等皇國民

たるものは國體の本義に透徹し、一億一心、速に個人主義・自由主義・功利主義の思想を脱却し、國防國家體制の完成に邁進しなければならぬ。もしかかる國家觀的基礎を缺くならば、高度國防國家建設に必要とする政治・經濟・教學・思想・生活等の根本的刷新もその目的を達し得ないであらう。

(三)その他の國內體制の刷新 高度國防國家建設のための國內體制の刷新の第二の問題は新政治體制の確立であり、第三は國防經濟の根基礎立であり、第四は國民の資質・國力の向上・人口増加に關する恒久的方策・農業及び農家の安定發展に關する根本方策の確立である。更に第五の問題として國策の遂行に伴ふ國民犠牲の不均衡の是正・厚生の施策の徹底・國民生活の刷新等が示されてゐる。而して新政治體制については更に細かく新國民組織の確立・議會翼賛體制の確立・官界新體制の確立が擧げられ、國防經濟の問



題については日滿支を一環とし大東亞を包含する協同經濟圈の確立・官民協力による計畫經濟の遂行・綜合經濟力の發展を目標とする財政計畫並に金融統制の確立・世界新情勢に對應する貿易政策の刷新・國民生活必需物資特に主要食糧の自給方策の確立・重要産業特に重要化學工業および機械工業の畫期的發展・科學の畫期的振興並に生産の合理化・交通運輸施設の整備擴充・綜合國力の發展を目標とする國土開發計畫の確立等が示された。

かくの如く、基本國策要綱は、國防國家建設のために政府の實行すべき具體的施策の基本及びその方向を示したものであり、今日種々の形態を以て具體化されつゝあるのである。佐久間象山は、その海防八策に於いて、平常の事は平常の法に隨ひ、非常の際には非常の制を用ひ候事、和漢古今の通義と存じ奉り候と述べ、國家の非常時には非常の決意と非常の體制と非常の努力の必要なること

を教へた。而も皇國日本は今や曠古の重大時局に直面してゐるのである。自我功利の思想を一擲し、國家國民の總力を國是完遂のために集中的に發揮すべき國防國家の建設に一億一心挺身しなければならぬ。

國防國家の建設には幾多の法規が必要であり、巨額の資本も必要である。しかし最も必要なのは旺盛なる國民精神の昂揚である。明治十四年農商務省の「興業意見」は明治時代に於ける日本經濟建設の基本的綜合計畫を研究樹立したものであるが、その中に於いてこれが具體的實踐を次の如く國民精神の昂揚に求めてゐる。即ち「今政府が此計畫を立つるに當り第一に要するものは折何なりや。蓋し資本なる可きか、曰く否。然らば則ち法律規則若くは諸設置なる可きか。曰く否。資本と法規は死物なり。獨行して效用を爲す可きものに非ず。然らば則ち第一に要するも



のは果して何ぞ。曰く法規と資本とを活用する所の精神是れなり。此精神なくんば萬の資本、百の法規あるも死資のみ死法のみ、豈能く其の用を爲さんや」と述べてゐる。

國民凡てはその職域と地域とに於いて奉公翼賛の精神を燃え上らしめなければならぬ。かくすることによりて政府の施策と一體となつて高度國防國家の體制は整備されるのである。敵に皮を切られてその肉を刺し、肉を刺されてその骨を斷つといふのは我が武士道の教へである。たとへ如何に長期に互るとも、艱難困苦缺乏に耐えることなくしては、大東亞共榮圈を確立することは出来ない。必勝の信念を堅持し、皇國に生き皇國に死するの覺悟を以て、われわれは國防體制を完成し、世界史轉換の聖戰を戦ひ抜かねばならぬ。

### 第三章 經濟新體制

#### 一、國防國家體制と經濟

國防國家體制即ち國家總力戰體制を愈々完成し強化するに當つては、國家國民のあらゆる生活活動の領域を根本的に刷新し、國防を主眼として國力を有機的統一的に集中し、その總力の増強を圖ることを必要とするが、その主要なる因子の一つが經濟であることは謂ふまでもない。近代戰は周知の如く精巧優秀なる武器機械化された裝備及びそれ等の大量的消耗を特徴とするが、かかる軍需品を十分に供給し得る力なくしては、最後の勝利を擱むことは出来ない。従つて近代戰に於いては武力戰に併行し、否それに先行して第一線の戰鬪力を保證し準備する軍需生産力の擴充



が要請せられるのである。これ高度國防國家體制の主要要素として經濟新體制の確立せられねばならない所以である。殊に近代戰は長期に亙るを常態とし、その場合物資の消耗は益々増大し、これが補給は愈々困難を加へると同時に生活必需品も亦勢ひ緊縮するの餘儀なきに至るものであり、軍需充足と生活必需品の確保のためには國家國民の經濟力は最高度に發揮せられねばならない。かかる意味に於てわが國は支那事變勃發以來、經濟力の強化に資すべき幾多の政策を樹立し、官民の協力によつてその實現を圖つて來たのである。例へば生産力擴充計畫、物資活用並に消費節約の方策、公私生活を刷新し戰時態勢化する方策、戰時食糧充實運動の方策、物資動員計畫、勞務動員計畫、産業再編成方策の如き、また先に述べた基本國策要綱に於ける國防經濟の根基確立のための諸方策の如きは、何れも總力戰體制に於ける經濟力の強化を目指

したものに外ならない。しかして斯る方策は漸次に法令として公布せられ、わが國の經濟は或は改編せられ或は著しく統制を加へられつゝあるのである。

今日では獨り經濟のみでなく、政治も外交も科學も技術も思想も生活も、更に娛樂までも總力戰體制確立の爲に刷新整備せられるのであつて、凡ては國防を規準として統制せられ或は改編せられ、國防に基づいて存在し得るのである。かかる理念に基づいて新に形成せられる經濟體制が實に國防經濟であるのである。

## 二、國防經濟

國民は常に國民としてその生成發展せんことに努力しつづつあるのである。而して經濟活動それ自體も、この目的達成の一手段として營まれて居るのである。従つて經濟は國民の行動であり、



而して國民は經濟の客體に非ずして主體であるのである。故に經濟の任務も、形態も、經濟それ自體が之を有するものではなく、國民によつて與へられるものであるのである。國民は前述せる如く國民としてその生成發展を期し、之に對する凡ゆる妨害を排し、自己を防衛することを必要とする。自ら防ぎ得ない國民は既に國民ではない。従つて國民の營む經濟活動それ自身も、國民の自己防衛の爲の一手段でなければならぬ。「國民經濟は、之が國民の生活表現である以上、常に國防經濟である」とドイツ經濟相フンクの謂へるが如く、既に平時經濟と戰時經濟との間に根本的區別は認め得ないのである。戰爭は經濟戰として既に平時に於いても行はれ、唯戰時に於いては其の様相が尖銳化するに過ぎないのである。従つて平時經濟と雖も常に國防經濟でなければならぬのであり、然らざればそれは決して眞の國民經濟ではないので

ある。而してこれこそ實に國民の本質より生ずる平戰兩時の經濟の構成原理であると謂はなければならぬ。

然るにこの國防と經濟とを分離せしめたものこそ自由主義經濟であつたのである。蓋し自由主義經濟の根本觀念は自由競争と營利慾である。而してこの自由競争と營利慾とは、相互に相反するものである結果、これが經濟活動の一般的規律力として働き、價格の自由變動を介して需要と供給との均衡が、自働的に調節せられるのである。従つて(一)あらゆる經濟現象の基礎は經濟人たる個人であり、此の經濟人の物質的欲望の満足即ち營利追求の努力が總ての經濟活動の動機である。(二)故に資本及びその利潤が經濟活動の樞軸である。(三)而して經濟活動はその本質上は取引であつて、供給と需要から價值を生じ、之が市場を形成し、支配する。(四)従つて經濟的現象の調節者も亦各個人の私利である。此の私



利は自由競争を通じてあらゆる利益の調和となつて現はれる。(五) 以上により自由經濟は結局最善の經濟を保證するものであるとせられたのである。斯くの如く自由主義經濟は、自由と自主とをその著しい特徴と爲すものであつて、従つて國家の經濟に對する措置例へば關稅その他の租稅の如きは、むしろ經濟の自然的運行を妨害するものとして、出來得る限り最少限度に止むべきものと觀念せられたのであつて、國家は單に經濟の自己法則的運行に、一定の秩序を保證するを以て足れりとしたのである。而して茲に國防と經濟との分離を生じ、國家の國民經濟運營よりの解離を生むたのである。然し乍ら自由主義經濟それ自體すら、それが發展するに連れ、自由競争がより激烈となり且長期に互るに至ると共に企業設備も漸く尨大となり、従つて企業の組織自體が硬化し、經濟活動の自律性が、その彈力を失ふに至り、自由主義經濟の行詰

りを生じ來れるのみならず、第一次世界大戰の尊き經驗及びその後の世界情勢の變化は國防と經濟との分離に對して、反省を必要とするに至つたのである。

然らば國防經濟の要件如何、第一に精強なる軍備を充實すると共に高性能の軍需品を大量に生産し得る生産力を整備確立することを要する。國防力の充實に軍備の必須なることは、今更謂ふ迄もない。今日ドイツが驚くべき戰果を擧げて居るところの原因は、一はその兵器の性能の優れたることであり、一はその兵器を大量に有することである。然し乍ら軍費は、之を純經濟的に觀るときは、消費であり、従つて負擔である。故に往々にして軍備の充實の企圖は、國民の經濟生活が壓迫せらるるが如く考へられる。然し乍ら軍備に關する支出は、之を國民經濟の見地より見るときは、決して消費的支出に非ずして、生産的支出であるのである。第



一に「軍備は平和の保證であり、軍事豫算は一國民がその公民的、經濟的獨立の爲支拂ふべき保険料である（ロレンツ、フォン・シュタイン）。即ち軍備に如何に多額の費用を要し様とも、常に何よりも高價であるのは國家の無防備であることを忘れてはならない。それと同時に軍備が經濟に或る確實なる生産を保證し、多くの場合に於いて經濟發展の任務をも果して居ることも亦事實であるのである。

而してこの軍備充實の要件を充たさんが爲には、先づ皇國の經濟をして、より高く、より廣く、より強きものたらしめなければならぬ。「より高く」とは國民の持つ生活力に、一層高度の生産性を持たしめることであり、「より廣く」とは經濟相互依存圏を、日滿支より更に大東亞に擴大し、以つて鞏固なる共榮圏を確立することであり、「より強く」とは皇國の經濟が外國に依存する限度を最少限とし、

如何なる事態に當面しても、微動だにせざる底力を保持することである。従つて國防經濟を確立せんが爲には何よりも先づ自給自足の態勢を確立することを必要とする。而して自給自足の態勢を確立せんが爲には、次の三個の要件を備ふることを要し、その第一は必要とする一切の物資を自己の勢力圏内に於いて獲得し得る體制を確立するとである。即ち廣域經濟圏の確立が要請せられるのである。此の場合に於ける經濟圏は、寒帶より熱帶に至る地域を包含すると共に出來得る限りあらゆる條件を備ふる地域に涉ることが必要であるのであつて、此の意味に於いて日滿支・東南アジア及び南洋を打つて一丸とし大東亞共榮圏の確立こそ最大の必要事であればならない。第二は自己の獲得し得る物資を以て、自己の必要とする總べての用途を充たすことである。我が國は、その經濟の後進性の必然の結果として、科學技術の基礎



を歐米諸國の模倣まぼの上に置いて居るのである。而して歐米諸國の科學技術は、當然に歐米諸國の資源並びに環境くわんきやうに、その基礎を置いて居る。従つてこの科學技術を模倣せる我が國科學技術も、歐米諸國の資源並びに環境に依存せざるを得ない結果となり、我が國經濟の自主獨立性を失はしむるに至つたのである。加之自由主義經濟、従つて國際經濟の崩壊は、科學技術に於いても封鎖的となり、その國際的融通性を失はしめたのである。茲に於いて科學技術の日本的性格の確立即ち大東亞共榮圈の資源並びにその環境にその基礎を置く科學技術の確立が、自給自足の態勢確立の一要件として要請せられるのである。ドイツは、その四ヶ年計畫に於いて、ドイツの有せざる資源を、ドイツの有する資源を以て生産することに努力したのである。人造石油、人造ゴム、人造纖維等皆この結果として生れ出たものであり、而してそれ等のものが、今

次の世界大戰に於いて、偉大なる貢獻けんげんを爲しつつあることは、世に知悉ししつせらるるところである。第三の要件は世界經濟に於いて優位を確保することである。即ち自己の勢力圈内に於いて、世界各國の必要とする物資の一又は數種のものに付、世界總生産額中の大部を有することである。如何に廣大な經濟圏を有する國と雖も、尙自己の必要とする物資の全部を自己の經濟圏内に於いて、獲得し得ざることとは、多くの實例の示すところである。而して、此等の物資を外國より獲得せんと欲する場合に於いては、その相手國の又欲するところの物資を自己の經濟圏に於いて所有することが必要とするのである。即ち世界各國の欲するところのものを所有し、その欲するものを與ふることに依つて、初めて自己の欲するものの確保を爲し得るのである。現在我が國に於いては、斯る種類の物資を有することが極めて少い。従つて經濟戰に於いて、



少なからぬ不利を痛感せざるを得ないのである。然るに大東亞共榮圈内に於いては、斯る種類の物資の多くを存するのであつて、此の意味に於いても、速かなる大東亞東共榮圏の確立が、要請せらるるのである。以上述ぶるが如く、自給自足の態勢を確立せんが爲には、前述の三要件を具備することが必要であり、三要件を具備してこそ、初めて國防經濟の確立が見られるのである。

### 三、經濟新體制

自由主義經濟はあらゆる經濟現象の基礎を經濟人に置くものであり、個々の經濟を中心として運營せられて居るのであることは前述の如くである。従つて個々の經濟それ自體に於いては、夫自己の目的を有し、従つて運營の計畫をも有する、然し乍ら個々の經濟の總和たる國民經濟それ自體は、何等の目的を有せず、従つ

て又計畫をも有しないのである。然し乍ら國防經濟にあつては、その經濟の主體は國民であり、且國民經濟としての目的を有するものであることも亦前節に於いて述べたるが如くである。従つて國防經濟にあつては、國民經濟それ自體を中心として、全體經濟が運營せらるるのであり、個々の經濟は全體經濟の構成分子たるの位置を有するものとなるのである。即ち國民經濟は一定の目的を以て、従つて綜合的運營計畫に従ひ、自己を中心として全體を運營してゆくのであつて、個々の經濟は、國民經濟の構成部分として、綜合的計畫運營の部分擔任者たる位置を占むることとなるのである。茲に自由主義經濟の運行と國防經濟の運營の根本的意義を異にする所以が存するのである。

支那事變の勃發以來、我が皇國の經濟運營の方式が、斯る意味に於ける計畫經濟への移行を必然とし、所謂物資總動員計畫に基づ



いて國民經濟が全體經濟として運営せらるるに至つたのである。然るに今日までの我が國經濟の運営はその根本的意義を異にせるにも拘らず依然として自由主義經濟の運営方式の體制の上に行はれたのであつて、茲に現在の混亂を生じた所以があるのである。ドイツ現經濟相フンクは、第一次歐洲大戰に於けるドイツ經濟の失敗の原因を多く列擧したる中に、その一として、戦時經濟的措施の即席式なりしことを擧げて居るのである。然り、經濟運營の方式が根本に於いて異なれるとき、その運營の基礎たる經濟體制の變革がなさるべきことは當然である。十五年十二月「經濟新體制」の確立に付ての要綱が閣議に於いて決定せられた所以も亦茲に存するのである。

而して經濟新體制に於いて、要請せられた要件は(一)産業組織(二)指導者原理(三)公益優先(四)連帶共助(五)官民一體の五であつたので

ある。

(一)産業組織 前述せる如く國民經濟が、一定の目的を以て、一定の計畫に従ひ、全體として運営せらるる場合に於いて、何よりも先づ國民經濟全體としての組織を要することは當然である。各個の經濟が、夫々自己を中心として、各、獨立して運営せらるる場合に於いては、全體としての組織は之を必要とせざること勿論であるけれども、斯る經濟體制の下に於いても、目的を有し且計畫に従つて運営せらるるところの個々の經濟それ自體は、一つの組織を有したるのみならず、集團的に經濟を運營する場合に於いても、一定の組織體たる形態をつくりてあつたことは、此の必要を如實に示せるものである。斯る意味に於いて、先づ國民經濟を全體として組織化することが必要であり、之が組織の基本的單位として産業別經濟團體が要請せられたのである。



(二) 指導者原理 經濟指導は自由主義經濟に於ける經濟の自主性に代はるべき國民經濟の實際的調節者である。經濟運營の目標は國家によつて與へられ、國家によつて決定せらるべきものである。その與へられたる目標に向かつて、國民經濟を運營する場合に於いて、即ち一の組織體を最も合理的、能率的に、しかもその總力を最も有効に活用せんが爲には、指導者原理に依る指導を以て最善の方法とするのである。指導者原理とは、與へられた任務遂行に付終始一貫せる責任の擔當と、而してその任務遂行に必要な範圍に於ける權限の附與を意味する。而して斯る意義に於ける指導者原理に基づく指導が、組織體の運營について、最も能率的なることは、現在の組織體の運營に於いて多くの事例を見得るところであり、殊に個々の企業體それ自身に於いても既に實施せられて居るところである。

(三) 公益優先 國民經濟全體を中心として經濟が運營せらるる場合に於いては、全體としての有利性、能率性が先づ判斷の對象とならなければならない。而かもその運營の目標が國家目的に存する場合に於いては尙更である。此の意味に於いて、國民經濟全體の立場に於いて、經濟の運營がなされる場合に、個々の經濟の有利性が全體經濟の有利性に反する場合に於いては、公益は常に私益に優先せらるべきものであることは當然であると謂はなければならぬ。

(四) 連帶共助 公益が私益に優先するの原則が實施せられた場合に於いて、即ち個々の經濟の有利性が全體經濟の有利性によつて犠牲とせられた場合に於いて、これに依つて生ずる犠牲の處置に對する問題は考慮を要する問題である。殊に自由主義經濟より國防經濟への移行の過程に於いて問題となるのである。國防經



濟體制に於いては、個々の經濟は全體經濟の構成部分たる地位を占むるものたることは前述せるところである。故に全體經濟は個個の經濟より成るものにして、従つて全體經濟は個々の經濟を最も有効に活用することによつてのみ成立し得るのであるのであつて、當然に之が活用を第一の目途となさなければならぬと同時にこれが指導の責に任じなければならぬ。而してその結果として構成分子は全體の責に於いて、これを保證することの必要を生ずるのである。斯くしてこそ國民經濟の全體としての運營の全きを得るのである。

(五)官民一體 國民經濟を全體として運營する場合に於いては、國家が經濟運營の擔當者である。従つて官民は共に國民經濟運營の擔當者であり、單にその分擔せる機能を異にするに過ぎないのである。此の意味に於いて自由主義經濟下に於ける官民の職分

と全く相異なると共に必然的に官民は一體たるべきものであるのである。

以上五の要件を整備せる新らしき經濟の體制を確立して、初めて國民經濟の総合的計畫に基づく運營も可能であるのであつて、一定の目的を有する國民經濟の運營に當つては、斯る經濟の體制の確立がその前提として必須の要件であるのである。

#### 四、國民への要請

經濟新體制の企圖する所が、究極に於いてわが國の經濟力を増強し、高度國防國家の物質的基礎を確立することには謂ふまでもない。しかしこのことたる單に法令の發布や組織の確立のみでは、十分な効果を収めることは出来ない。國民各自が、眞に總力戰體制の經濟戰士としての自覺をもち、積極的に協力すること



によつて、法令や政策や組織は生き働いてその成果を全うし得るのである。従つて經濟新體制に於いて國民に對して要請せられることは、かかる體制を確立するため、の諸統制に絶對的に服従すると共に、生産能率の向上のために歡喜力行くわんしんりやく以て勤勞報國職域奉公に挺身することと、物資節約のために生活を刷新して徹底的に消費の節約を圖ることとである。

## 第四章 食糧問題

### 一、食糧問題と國防國家

大陸に兵を進め、又南方に日本の國策を遂行するに當つて、日本の國內に於ける國民生活の安定を期すると言ふことが、此の際の根本の要件であることは言ふ迄もないことであり、其の國民生活の安定を期すると言ふ意味に於いての基本が食糧問題であること亦言を俟たないのである。

今迄長い間我が國は豐葦原とよあしはらの瑞穂みづほの國と謂はれて、過去の幾多の戰爭、即ち日清、日露の兩戰役、前の世界大戰、滿洲事變の何れの經驗に於いても、食糧に關する限り不安を感じたことはなかつたのである。然るに最近の食糧の問題に就いて非常な不安を生じ、其



の爲に各種の混亂乃至は摩擦を生じ、我が國としては未だ曾つて味つたことのない苦痛を経験したのである。斯様な食糧の状態に於いて、否戦時下に於いて、益、困難の加はることが豫想せられる場合に於いて、日本の重大なる使命を遂行する爲に如何なる方法を執つて行くべきか、先づ之を明かにし、而して政府は勿論國民全般が協力一致して、必ず此の困難な問題を解決すると言ふ決心で臨まなければならぬ。戦時食糧体制の確立と言ふことは、高度國防國家完成を企圖し、之に邁進しつつある我が日本として緊要なことであり、官民一體となつて、やらねば出来ぬことであり、やらねばならぬことである。

## 二、食糧増産

食糧對策の第一は食糧の増産である。事變以來、農村に於いて

は、青壯年の應召、軍需工業其の他生産力擴充方面への轉出、牛馬の徵發、買上げ等の爲に、勞力の不足を來し、又肥料及び農機具等の諸資材の供給が減じたり、不圓滑になる等の惡條件があるに拘らず、之と闘ひ之を克服して、食糧の生産を確保し、更に進んで増産の實を擧げて居る。このことは事變以來、官民一體となつて増産に努力して來た結果と謂ふべきであるが、殊に生産農家の異常なる努力によること大なりと謂はねばならない。

米麥等の食糧増産計畫が本格的なものとなつたのは昭和十四年からであつたが、昭和十四年は、稲作期間に西部日本は稀有の旱魃に見舞はれ、朝鮮に於いては之以上の大旱害があつて爾來米穀需給に重大なる影響を齎すに至つた。昭和十五年は、關東以西各地方では稲作初期の旱魃、續いて明治三十年以來と言はれる浮塵子の大發生に因り、又東北、北海道等では冷涼多雨の天候及び稻熱



病の發生等の事故があり、其の他種々の原因の爲に一千萬石以上の違作となり、朝鮮に於いては辛うじて平年作に近い收穫を得たが、臺灣に於いては不作であつたので、内地の米穀需給は依然として困難であつた。茲に於いて、上述の昭和十五年迄の食糧増産計畫は、言はば應急的のものであつたが、昭和十六年よりは、我が國の食糧需給の將來を見透して、恒久的第一期計畫としての十ヶ年計畫が樹立せられ、尙昭和十六年の増産計畫が併せて樹立された。先づ、恒久的十ヶ年計畫では、耕地事業を根幹として、開田二十萬町歩、開畑三十萬町歩及び用排水改良、暗渠排水、床締客土地、地下水源地開發、耕地整理等の改良事業百七十二萬町歩を五ヶ年に着手し、凡そ昭和二十六年迄に完成して、研究施設の擴充に依る反當收量の増加とも相俟つて米穀千百萬石、麥類(稈麥又は小麥に見積り)千二百萬石を増産せんとするものであつて、大規模なる土木事業は之

を農地開發營團を設置し、之をして行はしむるのである。尙、現下の國際情勢の見透しと食糧増産の見地から桑園の整理が計畫されて居る。又國家總動員法に基いて、臨時農地等管理令が昭和十六年二月一日制定せられて、農地が農耕目的以外のものを使用されるときは許可を要することとなり、且必要に應じて作物の作付の制限や作付の命令が行はれ得ることとなつた。次に、昭和十六年の應急的食糧増産計畫は、大勢に於いて、これ迄の増産計畫を踏襲強化して、差當りの必要に應じようとして樹立されたものである。

食糧戰爭の武器は鋏である。此の鋏を揮つて食糧を増産すること、之が現在の食糧問題の解決の第一着手であり、總べての方策の最後が亦之に關するものであつて、刻下銃後農民の御奉公は之に盡きると言ふことが出来る。



## 三、供給確保

食糧對策の第二は食糧の確保である。農産物は改めて言ふ迄もなく、收穫する迄に一年かかる。然も一年かかつて果して計畫通り出来るか如何かは人力のみでは如何とも爲し難い點がある。茲に於いて、主要食糧たる農産物に就いては常に相當の餘裕を持つて居らなければならぬ。將來に備へて十分慎重に萬全の用意をして置かなければならぬ。第一次歐洲大戰に於いて獨逸は、戰鬥に勝つて戰爭に負けた。國民が「勝利よりもパン」を欲した爲に敗戦の慘狀を深刻に經驗した。そこで、今度の戰爭を始める前に、獨逸は勿論英國迄が如何に食料の蒐集貯藏に努力したかは周知の事實である。食糧の確保と言ふことが彈丸の確保と同様戰爭遂行上の要務であることを認識する必要がある。

食糧確保の爲政府が採つた方策は、内地米に就いては米穀の國家管理制度の實施であり、外地米移入促進の爲の各般の努力であり、外國米輸入の斷行であつたのである。而して今後のものとして、否今や採られつつあるものとして、米穀のみならず麥類、馬鈴薯、甘藷等の食糧農産物及び小麥粉、麴麵等の加工品の國家管理の強化等の諸方策である。

(一)米穀國家管理制度 先づ米穀の國家管理制度は、昭和十四年米産に就いて政府は約四回に分けて買入れを實行したが、其の實行に當つて種々の困難を生じたので、昭和十五年産米に就いては、當初から一定の計畫を樹立し一貫した方針の下に國家の管理の下に置き度いと言ふ趣旨で、其の實行に必要な省令を「米穀管理規則」として制定公布し、昭和十五年十一月一日から實施したのである。此の制度の運用に依つて、内地に於ける所謂管理米の數量を急速



に確立し管理米となつたものの所在を明確にすることにしたのである。即ち、農家は、自家用保有米を控除した残額について市町村農會の割當に應じて管理米として、地方長官の指定する管理倉庫に供出する。管理米は處分の制限を受け、政府米として買上げられるもの以外は、臨時米穀配給統制規則に依つて定められた徑路に従つて、地方長官の指示に基いて配給されることになつて居る。此の供出の實行については、なるべく早く所定の場所に集荷することとしたので、農村方面では、従來の各地方の慣行等から考へても、此の制度に依つて相當窮屈なことになり不満もあらうと思ふが、現在の食糧事情は、前述の如く、管理米の數量を早く確定し且其の所在を明確にすることが絶対に必要であつたので、方針通り此の制度を實施して行つたのである。幸ひにして、農村方面の現下の時局認識に基づく非常なる協力に依つて、極めて順調に進

捗し、その結果、食糧事情も樂觀は決して出来ないが、落着きが出来て、四月一日からの六大都市の通帳制に依る割當配給制の實施も無事行ふことが出来たのである。又都市の此の節米勵行に應じて農村方面に於いて、更に、自家用保有米の中から自發的に管理米に供出しようと言ふ運動の展開を見つつあることは、我が日本の總親和の美しい姿を茲に見出すことが出来て、洵に愉快である。尙米穀の國家管理と言つても、管理米は、自分で消費するとか、他人に譲渡するとか、贈與するとか言ふ様なことが禁止されて居るだけで、販賣すると言ふことに就いては何等制限されて居ない。ただ其の販賣又は販賣委託の方法が、臨時米穀配給統制規則に依つて定められた徑路に従つて實施されることになつて居るのみである。

(二)外地米の移入確保 次に外地米の供給確保の問題であるが、一體、



我が國に於ける米穀の需給關係は、大體に於いて内地と朝鮮と臺灣の三者を綜合して見るのが至當であるとされる如く、外地米の關係は既に事變前から大きな問題であつたのである。即ち通常内地では六千五百萬石の生産があるとして、之だけでは内地の人口を養ふには足りないのである。例へば昭和十四米穀年度(前年の十一月一日から其の年の十月三十一日迄を其の年の米穀年度と謂ふ。従つて昭和十三年十一月一日から昭和十四年十月三十一日迄を指す)の内地の米穀の消費數量は約七千九百萬石であつた。そこでその不足分を外地、即ち朝鮮及び臺灣から供給を受けて居た。即ち朝鮮からは少い年で六百萬石、多い年で一千萬石、又臺灣からは四百萬石乃至五百萬石の數量で供給されて居た。合計すると多い年で一千五百萬石、少い年でも一千万石程度のもものが外地から移入されて居たのである。かくして内外地を通じて

見るときは、何等不足がなかつたのみならず、所謂餘剩米對策を必要とする位に餘裕のある需給關係であつたのである。

然るに昭和十四年、朝鮮に於ける大旱魃の結果、一千万石許りの減收を生じ、殆んど朝鮮から内地に供給することが出来なかつた。其の爲内地の米穀需給關係が甚だ不安定なものとなつたことは既述した通りである。そこで内地としては臺灣からの移入米に期待したのであるが、種々の原因の爲に之亦著しく減少した爲、益内地の需給を困難ならしめたのである。

昭和十六年米穀年度も外地よりの移入は期待した通りには行つて居らない。其れは、朝鮮に於いては二千百五十萬石と前年の一千四百萬石に比較すれば相當の回復を示して居るが、平年作の程度に達して居らないし、臺灣に於いても、昭和十五年秋の大暴風雨で十五年第二期作米は三百六十八萬石と言ふ甚だ香しくない



生産高で十六年第一期作米に期待する外ない有様である。一方外地に於ける消費は種々の原因で増加してゐる。

内外地各別箇に各の食糧需給を樹立し、プロツクの之が交流の門戸を開閉するが如き現況は、國內一般の食糧管理上遺憾と認められ、此の際内外地を通ずる食糧管理の一元的統制を講じ、中央指導の下に内外地とも共通基準に基く需給計畫を樹立實施すると共に相互間の食糧交流の圓滑なる運営を圖り、内外地一體となつて國內自給計畫を樹立實施して行くことが緊要である。

(三) 外國米の輸入 外國米の輸入は昭和十五年度の需給のバランスを合はせる爲に斷行された措置であつて、昭和十六年度も引續いて行はれて居るのである。外國米の買入れを爲すに就いては、必要なる輸入資金の手當、配給の手當等に就いては色々の困難がある。然し此の米の問題に就いては絶対に必要數量を確保しな

ければならぬから、政府としては凡ゆる手段を講じて、此の外國米の買付を計畫通り實施して行く爲に萬全の努力をしてゐるのである。ただ外國米の輸入に就いては、資金の關係の外に、配給の關係、船積みの關係、産地に於ける移出可能數量等の關係から見て、實際問題として輸入數量に限度があるので、國內に於ける供給確保と消費規正の徹底を圖らねばならぬこととなるのである。

#### 四、配給—配給機構の整備

食糧對策の第三は配給の圓滑適正を期することである。此の爲には配給機構の整備が行はれねばならない。殊に集荷の方面に就いては、臨時米穀配給統制規則が集荷の經路を明かに規定して居り、管理制度が實施せられて居るので、消費者へ配給する部面に就いて、公平にして圓滑なる配給を行ふ爲に適當なる配給機構



を整備する必要があつた。即ち此の配給機構整備の必要は、公平にして圓滑なる配給を行ふと共に、消費規正の徹底を期する爲の割當配給制實施に際し痛感せられたのであるが、一方業者側に於いても、従來の如き個々の無統制な經營方法ではやつて行けなくなり、合理的共同組織の必要を感じて來たので、六大都市を始め各地に於いて急速に進捗した。茲に所謂共精共配に依る米穀取扱業者の企業合同が續々行はれたのである。

### 五、消費—消費規正

食糧對策の第四は消費の問題である。先づ消費數量に就いては其の規正を行はねばならぬ。

(一) 割當配給制 其の方法の一として割當配給の實施が考慮せられ、昭和十六年四月一日から全國六大都市に通帳制に依る割當配

給制が實施せられた。之に依ると一人一日の割當定量の基準數量は、數へ年十一歳から六十歳迄の三三〇瓦(約二合三勺)最高數量は特別増量を受ける所謂重労働者男子の四八〇瓦(約四合)であつて、外に業務用、工場給食用、三食外食用の特殊配給が考慮されて居る。

敘上の割當配給制は、四月末に、昭和十六年三月から十月末迄の各道府縣別の消費高が政府に於いて決定せられ、各道府縣に於いて其の規正された消費數量の範圍内で其の道府縣の需給を賄つて行くべきことになつたので、普遍化せられ、全国的に公平なる消費規正の徹底が圖られることとなつた。或る程度の主要食糧の不足に依る苦痛は、國民各自が均等に分擔するに於いては極めて輕度のものとして爲し得るものなることを考へ、寧ろ戰時に於ける公的義務とすら觀じて、時局下食糧問題の重大性を認識して國民各



自が心から此の消費規正に協力すべきであらう。

(二)代用食混食—郷土食、國民食 消費規正の方法として、昭和十四年秋の米穀供給不足に直面して、先づ米の搗精度を法的に制限することが行はれた。即ち、七分搗きの勵行が行はれたのである。又酒造米の制限を酒造業者の協力の下に行ひ、更に代用食混食を獎勵する等の方法を講じたのである。

此の代用食混食の問題は、消費する食糧の内容の擴大の問題であつたとも言へる。從來我が國の食糧問題と言へば、大體米穀だけの問題であつて、食糧政策は即ち米穀政策であつたのであるが、今日從來の米穀中心の考へ方を、食糧と言つた大きな概念の中で再検討しなければならぬ時である。茲に於いて混食代用食の問題は、單に米穀の消費數量の節約と言つた觀點よりもつと大きな見地から眺めねばならぬ。「郷土食」「國民食」の新しく世に提唱せら

れる所以も亦茲にあるのである。「適地適食」と言ふか、其の土地、土地に於いて豊富に入手することの出来る食糧を、榮養等の見地から再吟味して攝取して行くことが、現下の食糧問題解決の一端として、もつと積極的に、もつと眞劍に考へられなければならぬ。而して其の場合に於いては、當然、農産物のみならず、水産物に就いても十分考へられねばならない。斯かる見地から、例へば米の生産高から言へば、自縣の需要を充足するに足りないが、其の縣として特色ある食糧資源を持つて居る所で、榮養等の點も研究の上、郷土食が獎勵されて居るとしたら、時宜に適するものと謂ふべきであらう。而して北海道に於いて「酪農食」と言つたものが、考究の上實行されて居ると言ふことは愉快なことであつて、他の諸地方に於いても大いに研究すべき問題である。



## 六、東亞共榮圈に於ける自給策確立

最後に、之と關聯して考へねばならぬことは、食糧問題が、事變の進展に伴ひ、現實の問題として、其の問題の考察範圍が日本國內から、日滿支へ、それから更に東亞共榮圈へと擴大して行つたことである。現在行はれ居る外國米の輸入と言ふことも、國際情勢の推移に伴つて、結局は東亞共榮圈内に於ける食糧交流の一現象に化して了ふのであるまいかと思はれる。斯くの如くにして、東亞共榮圈内に於ける食糧の自給自足と言ふことが考へられなければならず、日本國內のみならず、日滿支三國を通じて、更に之に南方の諸邦を入れて、其の食糧の需給を調節し、或は其の増産を圖ることを考へねばならぬ。今日我が國は東亞の新秩序を建設する上に於いて、其の盟主として、東亞共榮圈内各地域の食糧問題について

配意して行かねばならぬと言ふ責任ある立場にあるのである。又現下の國際情勢の推移は、我が國が東亞共榮圈内に於いて食糧自給策を講じて、東亞新秩序の確立と言ふ聖業を完遂する上に、萬全の努力を效すべきことを要請して居るのである。

現下の食糧事情は、以上述べた如く、容易ならざるものであり、我が國の、そして延いて我が國民の食糧政策上の使命も亦敍上の如く重且大なるものである。此の秋に當つて官民一體となつて今日の此の難局は、光輝ある東亞新秩序確立途上の一大試煉であることを認識して、食糧の増産を圖り、銃後御奉公の赤誠を示すべきである。



## 第五章 科學日本の建設

## 一、科學の目標

現在日本が直面してゐる難局は眞に未曾有のものである。外からは、いつ如何なる外敵が、蒙古襲來の時などと比較にならぬ規模と企畫とを以つて押しよせるかも知れない虞があり、内に於いても緊急解決の要のある數々の問題がある。對策は今日色々立てられて居るが、それらのいづれも科學を無視しては成り立たない。目下大多數の人々の最大關心事であるところの各種兵器の改良の問題は云はずもがな、天然資源の開発利用、一般生活物資の増産配給、さては國內の政治・經濟等の機構の合理化、人口の増加、健康能力の増進等の諸問題に至るまで、すべて單なる努力や愛國の熱

情だけで片づくのではなくて、各の現場に於いては、必ず科學の充分な驅使、或はそれとの緊密な協力を必要とする。

然るに、日本人は從來長らく天佑に恵まれ、この小國に安穩すぎるその日を過した關係で、この國防上或は實生活上の利器である科學の理解や使ひこなしが不充分であり、上述の各種の方面の困難打開がまことに抄しく行かない。

もとより、明治維新後約七十年のこの方面の進歩は驚異に値する。それは日本人の愛國心と慧敏と勤勉とを以つて始めて達成されたものであり、今日、科學の水準は決して世界の二流に落ちるものではないであらう。然し世界の一流中の一流に伍し得るか、と云ふと、平均的に眺めれば、残念ながら未だそれには若干の距離があることを卒直に認めざるを得ないのであらう。

世の中には九十五點主義と云ふものがある。なる程一般人の



處世に當つてはこれが適當であるかも知れない。然し事國防に關する限り此の寛大は許されない。なぜならば戦ひは所謂食ふか食はれるかであり、而もその劣敗カッパによつて食はれる速度は近代の兵器の進化によりて前代未聞の早さに達したからである。昔は勝つも負けるも、人間のあるく速度に支配されて敏速には行かなかつた。然し現在では負けたとなつたら、立ち直る暇ヒマもなく何百キロメートルの距離も忽ちにして席捲セキケンされてしまふのである。又いくら日本が神國だと云つても、單に神風の威力にのみ大きな信頼をおくことは出来ない。

よつて完敗の憂き目を見まいとすれば、我々は日頃心して充分に備へなければならぬ。然もその備へと云ふものは大量でさへあればよいのではなく、質に於いて常に敵を充分ぬくものでなければならぬのである。尤も人が感激して立ち上れば、平時に

何倍する驚くべき仕事をなすことが今でもあり得るかも知れない。また、過去の時代に於いては彈丸がなければ肉彈でと云ふ様な無理な代用も許された。然し近代の科學兵器に關する限り、俄かの奮ひ立ちや膂力リキリキの代用では、到底缺陷の補ひが出来兼ねるのである。即ち日頃の長い知的修練と生産力の準備とを必要とする所以である。

現在、我が國民全般が抱かねばならぬ科學日本建設の理想は、以上の考察によつてはつきりする。それは、せめてドイツなどに二、三年おくれて追隨したいなどと云ふ低調のものではないのである。如何なる國を目標としても、絶對不敗を保證するに足る根據あるものでなければならぬ。

## 二、科學の内容



次に科學日本の建設の理想の中に盛るべき科學の種類に言及しよう。一口に科學と云つても、今日之は様々に分化した。所謂純正科學中に論理學、數學、自然科學等があり、應用の方面に工學、醫學、農學等があり、更に人間の社會生活に關係するものとして所謂社會科學、文化科學、歴史科學等がある。之等の中、工學、農學等は、技術と稱して科學より分離して考へる人もあり、また社會科學以下の科學は、名は科學だが、今日その内容は貧弱であり、未だ堂々と仲間に入る資格はないものだとの見解を持するものがある様である。然しよくその各の内容を検討して見ると、この考へはすこぶる狭小であるのに氣づく。事實、之等の各部門はそれの着眼の範圍や目的を若干異にするとは云へ、之を取り扱ふのは同じく人間であり、使用する頭腦作用は等しく觀察であり、分析であり、綜合である。世には發見に關係する仕事が科學であり、發明や設計に關

する仕事は技術であるなどと強ひて繩張りを立てるものがあるが、なにがしかの前者の要素を含まない發明や設計は事實上ないのである。又所謂人文科學は、自然科學關係のものと無縁のものであり、甚しきに至つてはそれの發達が後者に禍ひを及ぼすなどと考へることも、甚しい迷妄と云はなければならぬ。

もともと之等の諸部門の目ざすところは、只一點人間であり、その探究の結果は人間生活の向上充實に資するものでなければならぬのであるから、その一點に於いて、それら各部門からの見解が撞着し、人間をしてその去就に迷はしめる様なことではいけない。尙、之等各部門は、最近益、狭く益、深く探り入る傾向にあるので互の撞着をきらつて、特定のものにだけ接して居る場合には、人間はどこまで誤り導かれるか判らない虞がある。よつて之等いづれもの、相ならんでの進歩、その全部の圓滿なる協力と云ふこと



が必要缺くべからざるものと考へられる。國家全局に於いては勿論のこと、一箇人の頭腦の中に於いても、之等各部門の知識をなるべく豊富になるべく釣合つひくひよく備へる必要があるのである。之に反し、若し各箇人が、極端なる専門家となり切つた曉には、各人は精神的乃至技能的の片輪となり終り、互に話しても判らず、同國人でありながら、さながら敵國人であるかの如き状況に立ち到る。かくては、如何に一億一心が唱へられ連絡のための機構がはりめぐらされたればとて、心からなる圓滿な協調は出来難くなるのである。

### 三、科學の擔當者

次に科學を誰が擔當すべきかについて述べる。近頃は科學が進歩し、専門分化して各、深く堀り下げる様になつた結果として、そ

れが専ら専門家の手に歸することが當然であると、専門家も一般人も考へて怪まない事が多い。然し之は大體に於いて誤りである。なぜなら、近代の科學の進歩は主として耕かされた領分のひろさ、測定や整理や生産などの道具立てに關するものであり、その根本の考へ方や根本のやり方の進歩ではなく、従つて全く齒の立たないなどと云ふものではないからである。又、その國家に對する實效の點を顧みても、小數の専門家だけの獨占であつては影響力が乏しく、國力をその最深の基礎より充分興起させ得ないのである。尙、各個人が直接物事に接して自ら理論を搜り當てると云ふことは一見迂遠つゝの様でありながら、今後と雖も決して排撃さるべきでない事柄でもある。なぜならそれによつて、簡素ながらも最もつかひこなせる理論に到達出来るし、また科學への親しみを増す効果が甚大であるからである。



尙指導階級の人々はその仕事が政治であれ、軍事であれ、經濟であれ、教育であれ、宗教であれ、藝術であれ、一般人に増して科學への理解が今後は必要であると考へられる。なぜなら、社會の有機性は今後益々累加し、又、兵器、交通機關等のみならず、一般人の生活の法や資財も次第に科學的の度を高めて行くこと考へられるからである。社會の如何なる機構や日常生活の如何なる微小な行動に向つて口を出すにしても、科學への充分の理解なしでは、もはや權威をもち得ない状態に既に達したと見るべきである。尙かかる人達は、現實の社會状態や、自らの影響下にある各箇の人々の性質や、その折々の氣持ち等を充分正確に把握する必要があるわけであるが、この能力は即ち平生の科學的修練によつて最もよく達成されるものであることも注意されねばならない。尙、之等の人々は社會的の勢力が大きい人々である。よつて彼等の科學への理

解の程度如何は、専門科學者の能率を支配することが甚大なのである。よつてかかる人々の、科學知識の向上は今後専門のそれと殆ど甲乙なき程度の重要性を持つ。但し之等の人々の場合は末節的な技能よりも根本理解や、見解の廣さに、重點が置かるべきだ。これを要するに今後の日本に於いては、科學は「國民皆科學」と云ふ規模に達しなければならぬ。之は青壯年男子を主目標とした國民皆兵よりも更に徹底したもので、眞に一人の老婆、一人の兒童と雖も、之から洩れることは許されないと見るべきである。

#### 四、文化に於ける科學の位置

さて上述の如き、國民皆科學の理想に到達した暁に、國民の智的水準の向上には誰しも異存はないとしても、それに附隨して道徳觀念、情操、體力等の一般的低下を見ることはないかと危懼する人



が恐らくは多いであらう。

なる程、近代の日本に於ける科學專攻の人々にかう云ふ缺陷をもつた人の多かつた事は事實であるから、かかる危惧の生ずるのは一應無理ではない。然し之は科學に附隨した免れ得ない性質ではなくて、主として人間の側の間違ひにある。

なぜなら、科學と云ふものが、合理とか能率とかを強調するに對し、道徳とか情操とか體育とかは全くその反對を要求するのであるかと云ふと決してさうではなく、後者も本來は合理や能率に出發するものであるからである。それらが今日、全く撞着するものであるかに見えるのは、後者の時代錯誤によるか或は前者の無理解狹量によるからである。

宗教の如きは、非科學がその本質であるかの如く理解される場合が今日非常に多いのであるが、之とても近代人の迷妄にすぎ

ない。なぜならいづれの宗教でもその創始時に意識的に科學否定の旗じるしを掲げたものなどはなく、大體に於いてその當時の最高の科學知識に抵觸しないものであつたことが普通であるからである。然し當時の科學水準の低劣の結果、今日から見ればそれが非科學に映ずるを免れない。それに些の修正も加へず現在に押しつけようと考へるところに撞着が起る。昔の宗祖達は決してかかる愚行を敢てせず、當時の最高の科學を驅使し、それを一つの踏み臺として、更にそれ以上の超科學たる宗教に進んだのである。國家精神もまた同様であり、科學の道具立てを如何にかひこなすべきか、又或は逆に、己を如何に合理化すべきかのよりどころとして、常に科學と同伴する必要がある。尙、科學を長年月に互り追究するときは、人間の考へ方が機械化し、身體も劣化するのが當然であり、然も、それで充分追究に耐えるものと考へる人があ



るかも知れないが、之も間違ひである。科學と云ふものはさう云ふ小手先きだけの技能で片づくのではなく、それを根柢から充分推進するがためには、智力はもとよりの事、徳力、體力のすべての充分なる協力を必須とすることを忘れてはならない。

之を要するに、目前の營利のための道具にするなどと云ふことでなく、科學を眞に根柢より推進するとか、或は完全に日本の國土に於いて培ふとか云ふことを目標にして、その振興を策するならば、それが徳や健康と遊離すると云ふ様なことは、本來毫も危惧の要はない事なのである。

##### 五、科學日本建設の根柢

科學を如何なる程度に振興すべきか、また科學の本性が如何なるものであるかは既述の通りである。ところでそれまでの進歩

の程度、又は、さう云ふ正しい取扱ひ方に到達させることが、現在の日本に於いて、極めて易々たることであるかと云ふに、之は必ずしもさうではない。なぜなら、この事は、一般人に向つて相當根本的な考へ方、行ひ方の轉換を要求することになるからである。

顧れば、明治維新は一大轉換ではあつた。鎖國の夢はここに於いて完全に打ち破られ、歐米の科學文明への追隨の涙ぐましい努力が識者によつてはじめられた次第であるが、まだその當初に於いてはその欲求する程度は大したものではなく、尙幸ひに、喜んで師となり、喜んで資財の供給主となつてくれる國がいくらもあつた。識者の努力はとりあへず、その丸なりの輸入や、その一と通り  
の使ひ方の教示などで略、充分であつた。科學を根本的に自力で推進するとか、國民一人残らずの頭の立てかへをするなどと云ふことは先づ必要とは感じられなかつたのである。大體學の根本



は外國に依存し、高級の仕事は少數の専門家が擔任し、一般人はその指令のもとに主として勞力を提供することにより、國力の伸展、商工業の隆盛を致して今日に及ぶことが出来た次第である。

然るに、周知の如く、今回の第二次世界大戰の勃發と共にこの體制はもはや持續することが出来なくなつた。科學技術の大規模化、その進歩の高速化が國防上の根本要求となり、一方、外國依存が極度に困難となつて來たからである。後者は、獨ソ兩國の開戦によつて極まり、今や日本は殆ど全き知的孤立に陥らむとする状態であると云つて過言ではない。

今は日本の國力や科學の一般水準は、勿論、明治維新頃のそれの比ではない。然し、その科學主義高度化の要請の内容も、今回の明治維新頃のそれの比ではない。

云ふまでもなく、依存の綱は全く斷たれてしまつた。もはや單

なる模倣や輸入の能力では何の役にも立たない。又、一般人と雖も、親船に乗つたつもりで専門家にまかし切つてよいのでなく、老若男女を問はず、自分の考へ方を科學的にし、日常生活を合理化し、更に進んで専門家に積極的に協力して行かなければならないのである。

之は日本のあらゆる層の人々に對する開闢以來の考へ方の大轉換の要求であると云へる。我々の日常の行動を反省して見れば、一寸した思ひ誤りでも、之を心より悔ひ改め、實行の上にそれを反映して行くことは中々容易ではないことに氣づく。まして今回の轉換は、事は小である様だが、日本國民の天性的な、或は少くも祖先傳來の考へ方の大轉換である。だから指導する人も、される人も一片の説教や一時的發奮位で片づくことと高をくくらず、充分本腰を入れて之にかからねばならない。



さて斯る主張に對し、世には相當の反感を抱くものが未だあるかも知れない。なぜならば之はヨーロッパ式な殺伐<sup>ころど</sup>な科學主義であり、日本在來の自然にとけ込んだ生活乃至それより發したところのおだやかな萬邦協和の理想に反するの印象をそれが與へるからである。なる程、血で血を洗ふ暴にむくいるに暴を以つてするは悪いことだとして我々の修身の書で教はつて來たところである。武力を以つて従へるのでなしに徳を以つて化することが出来れば、その方が上策であることは論を俟たない。然し、昔語りにある聖僧が猛獸を手なづけた如き事柄は、今日に於いては中々に望み難い。なぜならば、高德を全然感得することの出来ない病原菌の如き存在も現在の世界には決して絶無ではないからである。我々は先づ、それを壓服するだけの積極的な力を必要とする。つまり、現世に於いては我々が徳の力を實行するも單なる精

神力だけでなく、充分物的な力の協同を必要とする。科學の實行に徳や體力等の協同を必要とすると全く同様、徳の實行にも、他のあらゆる力の協同を必要とする。現在に於いては、何事も個別に働かしたのでは有力たり得ないのである。

よつて、科學主義の鼓吹<sup>こすい</sup>が、目前に於いて殺伐主義の鼓吹に墮<sup>だ</sup>する様な印象を與へることがあつても、それは高德を行ふの基礎工事として、現在の時代に於いては眞に止むを得ない事柄であると認め、疑ふことなく邁進の要がある。

#### 六、我が國民の科學的素質

さて、次に問題となるのは、自己の奮起邁進だけで、高度の科學を確立するだけの素質が日本人にあるかどうかと云ふ點であらう。之に關しては、昨今様々の説がある。最も樂觀的なのは、舊時代



に於ける日本刀の技術や、小數の先覺者達の功業を引いて、日本人が凡てないと云ふのである。そして、舊來の日本科學の傳統を棄てて、輕卒に、西洋科學に乗りかへたところに、現代の日本科學劣弱の禍根がひそむとなす。また、近代の實驗心理學者の中にも、アメリカに於ける世界各國の二世達の性能試験の結果を引き合ひにして日本人の最優なるを説くものがある。

然し、之に反し、頭腦解剖學上、或は骨相學上、日本人は素質的に暗記模倣には長ずるも、解析や綜合の能力には缺けるところがある。とか、精神總力が不充分であるなどと論をなすものもある。

之等の諸論には、輕々に正否の斷定を下すべくもないが、我々は之等の中間をとり、日本人は世界各國民中、その科學進究に對する素質の上に於いて、略、中位乃至中の上を占めると考へれば、最安全であらう。即ち全くずるけて居て首席をしめ得る程の秀才では

ないが、銳意努力をすれば、優等の仲間には這入れるであらうと云ふところである。

日本人の性能を分析的に考へて見るに、理智も、意力も、情操も、體力も、個別的には皆相當に備へて居る。理智の中、分析や綜合よりも、暗記や模倣に長ずることは事實であるとしても、分析や綜合も、これをやらうと思ひ立てば相當にやりこなせる能力はたしかに持つて居ると見てよい。之だけから觀ずれば、素質上の缺陷として特記するものは何もない様に思はれるが、事に臨んで之等のいづれを最も強く發揮するかに残された問題がある。日本人は、多くの場合、冷靜に理づめに計算的に、能率的に物事を實行するよりも、むしろ直感的によつて自己の行動を律する傾向がつよい。又、趣味とか嗜好とかの方面では、こつてりしたものよりも、淡白を愛し、殘虐性が少く、自然に親しみ、平和を愛するといふ人間としての



美點を多分に持つが、その反面に機械的なものの中になじみ住み難く、かつ物事への執着性や徹底性が足りない。やる氣になれば出來なくはないのであるが、好んでそれをやらうとせず、少し氣がゆるめばすぐ、南洋的安逸や、無理論に還元してしまふのである。又、實生活上の雜問題の處理に當つても、それに積極的にぶち當り、人爲的に或は實質的に解決することのかはりに、

「三度食ふめしさへ堅し軟かし

思ふ様には ならぬ世の中」

の古歌の様に、すぐ自己の内面的なあきらめに解決を見出してしまふのである。根本は素質にあると思ふが、長い間日本民族の生活がこれを助長したことであるだらう。之は、舊來の所謂「自然の中」とけ込んだ生活には缺くべからざる心の持ち方であつたと考へられるが、近代の積極生活に向つては障害になること確實で

あると云へる。

素質的な問題は俄かに動かし得ないとしても、傳統的な精神作用發揮のつり合ひを更改することだけは、比較的容易に出来ることである。考へられ、この點に我々は多分の望みをかけることが出来るのである。芯しんからやる氣になつて呉れさへすればそれで大半は片づくのであり、現在はその氣分轉換に最も好都合の時である。但し、單なる釣り合ひではあるが、之は、幾百、幾千年の長きに互る傳統であるから、外方からの一片の説教や號令位によつて一舉の解決は望み難い。

ここに、新しい社會制約の確立、周到なる教育制度の確立の二つが必須なものとして浮び上つて來る次第である。

## 七、科學日本建設の方策(一)



日本には數々の立派な社會制約が既に確立されて居る。徴兵忌避を惡徳と認めることなどがこの一例である。之は日本古來からのものでなく、徴兵制度が敷かれた後のものであることは確かであるが、今ではそれが實に嚴たるものになつて一般人の上に臨んで居る。又、盜みを惡徳視する事の如きは、君子國と云はれるだけに他の東洋諸國に於いてよりも昔から遙かに強い。このいづれかを犯せばもはや人前に面をさらすことは出來ない。然し、非科學は今日迄のところ、何等惡徳として糾弾されるところとはならない。たとへば、生理衛生の知識をまるで心得ず、或は知つて居ても實踐する氣が更になく、日常非衛生の限りをつくし、物資を浪費し、身體をそこなひ、子孫に惡疾や惡質を遺傳させても、平然として人の頭に立つて、當人も世人も一向怪まれないのが普通である。臺所では、ガスや電氣や食糧のむだ使ひをいくらしても、その

人が美しく、しとやかにふるまふなら立派な淑女として人前に立つて行ける。他人の理に服しないこと、不合理を下に向つて強制することなどは、有力者の特權位に考へられても居さうである。

然し、之等の非科學や不合理が、如何に國家に禍ひをするか？

それを思へば、こう云ふことは、徴兵忌避などと少しも變らぬ惡徳として將來は糾弾されることにならねばならぬ。「徴兵忌避は國民の恥」と云ふ制約は、何十年にして我國に確立された。丁度それと同じく、國民皆科學を標榜する將來の日本にあつては、非科學は國民の恥「科學を心得ぬものは非國民」と云ふ制約が出来るのが當然であると思はれる。之が出來れば、一般人の考へ方、行動のし方に根本的な變改が日ならずして現はれて來るであらう。あらゆる宣傳教化機關を通じ、官民共にこの制約の確立に努力する必要があると思ふ。



## 八、科學日本建設の方策(三)

科學教育が今日迄低調に失したと云ふことは衆目の認めるところである。日本人は素質の上に若干の缺陷を藏する上に、過去の我國の傳統は科學に向かつて不適當に構成されて居る。この事實を卒直に認め、教育制度を外國の模倣などてなしに、眞に日本的に、且つ拔本塞源的に整備するを要する。

日本の在來の科學教育の缺陷の最も見易いのは、それが、詰め込み主義、羅列主義に失し、且つ、實見主義、實踐主義でなくて主として紙上主義、觀念主義であつたと云ふ様な諸點であらう。なぜこのやり方が世界で類例もない位、我國に於いて行はれる様になつたかを考へて見ると、暗記や模倣に長ずると云ふ素質を持つ日本人の頭に、それがとりあへず最も受け容れられ易かつたことと、教へ

る側にとり最も骨が折れなかつたこととに主としてよると考へられる。之によるときは最も容易に形式は整ふが、知識の内容は誠に貧弱であり、活用性に乏しい。然も、眞に科學の滋味に接せしめることなく、單に試験によつて強力に引きずることであるので、科學への愛好心を生ぜしめなかつたばかりか、多くの人々には科學嫌惡の感を起さしたことは重大なる罪過であつたと云へる。科學への自然的な性向を豊富に持つて居た人でも、之によつて全く芽を枯らされた場合が多いであらう。

科學は本來實生活に發生し、その理論は直ちに立ち返つて實生活に潤ほすを常道とする。將來我が國に於いてもその常道に則り、實見主義、實踐主義が鼓吹されねばならぬ。而して、羅列主義ではなくて、先づ理論の根本理解が主とならぬばならぬ。全部の科學への理解とそれの綜合が、各人に於いても必要と云ふことは既



述した通りだが、それは最初から羅列を意味するものでなくて、むしろ、一つの問題についての徹底的究明を意味する。然るときは、そこに於いて、あらゆる分野に共通な探究方針、方法等が會得される。尙その一例題は、表面的に見れば、動物とか植物とか云ふ一狹小分野に關することであるかも知れないが、それを深く掘り下げて行けば、そこに殆どあらゆる他の分野と關聯が立ち現れて來るのを普通とする。よつて、之により、却つて眼界の狹小化がふせられるのである。こう云ふやり方によつて、一藝に達すれば萬藝に通ずが今日に於いても可能なのである、之は今後の科學教育に於いて大いに重視せらるべき事である。

教育が極度の総合的な仕事であると云ふことの認識も從來は缺けて居た。また、或る學科を如何なる時期に修得さすべきか？適性は如何にして、またいかなる時期に見出すべきかとの認識も

未だ不充分である。第一項に關しての最大の間違ひは幼年教育を全く失してしまつたことにある。今日、科學に關する大學または専門學校の價值を忘却する人は一人もないが、學齡以前の科學教育に着眼する人は殆どない。然し、ここそは第二の天性の形成に最大の影響をもつものであり、後者こそは却つて前者よりも重視されねばならぬ。日本人の殆ど素質的缺陷と考へられる科學愛好心の稀薄、追究力の衰へ方の早いこと、立體觀念の缺乏等は、主としてこの時期の放任により結果されるものであるかも知れない。だから、此の時期を理想的に過さすことにより、之等の缺陷は相當に補償出來ると考へて大過ないであらう。この期の教育としては家庭ならびに社會による環境教育が最重大である。此の事のために、家庭の科學化、科學博物館の増設、乃至社會全般の科學博物館化が必要である。言は誇大の様だが、社會の一般の品物



に科學教育的意識を盛ることにより、之は易く實現出来るのである。尙進んで幼稚園、託兒所等に、本務の指導員をおき、意識的な科學指導を行ふことも有効であらう。

尙幼年教育にかけねばならぬ學科は、高等な知的作用を要するものでなくて、主として本能に訴へる簡素なるものが望ましい。音感、色感、立體觀乃至初等幾何學……等の訓育が之にあてはまる。こう云ふ種類のもものは、時期を失しては、何人によつても決して完全に修得出来ないものであるから、此の時期を、他の、長じても學べる様なことのために徒費せしめない様深甚の注意が望まれる。

### 九、結 語

之を要するに、新しい意味の科學日本の建設の仕事は、從來の如き模倣主義の強化や學校、研究所等の施設の増張等の如き惰性的

乃至物的のもので事足るのでなくて、それは多分に内的であり、基礎的であり、且つ根本的な轉換を伴ふ。それは相當骨が折れる仕事ではあるが、事物の發展途上に於いては免れ難い脱皮作用である。之を國民の協力により一刻も早くやり遂げ、科學日本をして世界に雄飛せしめねばならぬ。



## 第六章 思想戦

## 一、思想戦の意義と種々相

高度国防國家は國家總力戰體制であり、これには軍事、政治、外交、經濟、科學等の凡ゆる國家活動及び國民生活の動員が要請せられることは先に述べた。しかして斯る體制の一肢節として、否體制そのものの基礎として國家國民の思想的裝備を必要とすることは言ふまでもない。思想戦とは國家總力戰に於ける思想的精神的方面を總稱したものであつて、内には國家の指導原理を確立してこれに背反する諸思想を克服し、舉國一致の精神的體制を樹立し、敵國による思想的攪亂に對して防衛する、外には敵性國の國民思想を混亂破壊して抗戰意志を喪失せしむることであつて、その

内容としては、國民の意志、感情、知性等の心理状態を始め、文藝、道德、宗教等文化の各分野より各種思想體系に至るまで、およそ思想的、精神的方面は悉く包含せられる。しかして思想戦が戦はれる場面は戦時と平時との二面がある。

(一) 戦時の思想戦(攻撃的思想戦) これは交戦國相互が武力戦の發動を中心に行ふ直接的な思想戦であつて、敵軍及び敵國民に對し直接間接の精神的動搖を與へて交戦意志、勝利への希望を喪失せしめて敗北意識に導き、又所謂第三國に對して精神的誘引を試みその態度を自國に有利に導き、以つて総合的戦果を擧げんとするもので、所謂諜報宣傳、謀略等の手段が用ひられる。戦時は兎角些細な事柄でも重大な作用を及ぼす程に各國の神經は鋭敏であるから、この虚を巧みに捉へて諸方面より工作するところに戦時思想戦の效果があり、又此の思想戦が效果的であればある程、他面軍費、



人員・資材等凡ての資源に非常な餘裕を保持し得るのである。

1 戦場に於ける思想戦 之は戦場に於いて敵軍の戦意を挫か  
がため、所謂紙の弾丸、聲の弾丸、音の弾丸等を使用するものであつ  
て、砲弾と共にビラが雨霰と降つて来る。對峙した敵軍に擴声器  
で以つて呼び掛け又は威嚇する、蓄音器で故郷の民謡を送つて郷  
愁をそそる。特に神経戦といはれるものは超高度の音響爆弾を  
以つて神経をいらだたせ恐怖心を募らせる、又紙片や聲音などの  
代りにスパイ乃至第五列等が直接種々の工作をする。

今次の歐洲大戰當初の爆撃は、先づ敵陣地・敵本國の上空に現は  
れビラの爆弾を投下することであり、敵軍の心を爆撃すること  
であつた。支那事變に於いても、彼の有名な杭州灣の敵前上陸に際  
し、日軍百萬上陸杭州北岸と大書したアドバルーンによつて敵軍  
の心膽を奪ひ、同時に各陣地に對しても同様のビラを上空より撒

布し、作戦と巧みに相呼應して迅速果敢に戦力を集中し、輝しき勝  
利を博したのである。

2 敵國民に對する思想戦 敵國の銃後の統一を破壊し、前線銃後の  
連繫を斷ち、國家總力の中核たる國民の精神的團結を弛緩崩壊し、  
後方を攪亂するものである。これは社會的不安・精神的動搖・銃後  
作業の妨害進んでは國民の思想分裂を起さしむるを主眼點とす  
るのであつて、主として文書・ラヂオ・第五列等によつてなされる。

支那事變に於いて重慶政府は、敗戦續きであるのを逆に大勝利  
だとか春季攻勢の成果などと宣傳してゐるに拘らず、自國の重要  
都市を猛爆覆滅せられても一般民には實狀を殆ど知らせてゐな  
い、それを我が方では逸早く眞實を知らせてやるやうに報道を續  
けなければならぬ。かやうに我が方は重慶政府下の一般民に  
對し支那事變の眞相を巨細に互り宣傳し、抗戦勢力を覆滅して聖



戦目的を認識せしめ、我が方の意志に志向統一せしむるやう努力して莫大の成果を得てゐるが、これなど好個の例證である。

3 占領地域に於ける思想戦 既に武力を通じて占領した地域に於ける文化工作である。占領確保した地域と雖も、抗戦分子は尙相當數残存し、歸順分子も何かの衝撃によつて翻意するかも知れぬし、特に敵本國が密かに連繫を附ける可能性もあり、ここに種々の對策が必要となる。既に、住民と敵軍との有形無形の連繫を断ち切り、抗戦意志敵對行爲を放棄せしめて、自國に屈服せしむる方策を講じなければならぬ。それには武力、政治、經濟、警察取締等による施策も必要であるが、彼等を眞に歸服せしむるには思想文化工作が肝要である。一昨年、ドイツが占領したポーランドにナチ精神を吹込むべく、直ちに文化映畫を種々搬入したが如きはその例である。

支那に於ける占領地域について之を見れば、彼の老滙なき大陸の各所にわが軍官民一般の下、抗日意識の拂拭、大東亞共榮圏の建設を目指し、政治、經濟方面は元より、言語教育、演藝、紙芝居等各種の部門を通じて思想文化工作の活動を續けてゐるのであつて、現地特に第一線近傍地區の宣撫班の忍従且果敢なる長期建設工作は既に周知の事に屬する。それは或る場合には第一線の將兵より以上の危険と辛酸とを嘗め、或る場合には慈母の如き溫容を以つて接しなければならぬ。新しく國民政府が成立して、治安の基礎を建設し、特に清郷地區の設置によつて生活状態を安定せしめつつあるため、同政府治下の思想工作は大いに進捗し易くなつたに相違ないが、矢張り第一線地區と同様、變轉し易い複雑な人心の機微を掴んで思想工作を遂行するには、實に並々ならぬ努力を必要とするのである。



4 第三國に對する思想戦　これは戦時事變に於ける思想戦の中で、敵軍・敵國民・占領地に對する思想戦と相並んで重要な位置を占めるものである。しかし第三國といつても、敵の同盟國・同情國即ち敵性國に對するもの、自國の友好國に對するもの、又は中立國に對するもの等に分れ、その上第三國內部に於いても、種々の立場を持つ人々を包含し、敵國民も自國民も共に居住してゐるので、その間の事情は微妙極まるものである。要は、第三國に對して敵國への意識・感情を悪化せしめ、自國への好意・好感を齎らさしめ、或る場合は敵國との間に軍事行動すら誘發し、然も中立國のみならず敵性國をも極力自國の友好國たらしめて、目指す敵國を國際的孤立に陥らしめなければならぬ。ここに交戦國双方から第三國に對する激烈な思想が捲き起こされ、文書・ラヂオを通じ、派遣員・外交機關を通じ、更に第五列・スパイを通じて激闘が續けられる。

前歐洲大戰で英國が勝利を占めた蔭には、直接敵國に對する思想戦のみならず、此の第三國に對する宣傳工作が重大な作用を及ぼし、米國の參戰といふ成功を収めたのである。今次の大戦で、ヒットラーが樞軸國家の電撃的勝利を誇示し、對ソ開戦と聯關して歐洲新秩序の建設を叫び、ルーズヴェルトの民主主義陣營の強化と共同戦線を高唱するとき、國內的の結束もさること乍ら、對外的の呼び掛けが重要な意義を持つてゐる。かくして第三國の好意・好感更に進んではその支援も得られるのであつて、思想戦の持つ役割も大きい。

(二) 平時の思想戦　その本質上、思想戦は、前節に述べた戦時事變に於いてのみ戦はれてゐるのでなく、平時に於いても常に盛んに且強力に行はれる。元來、各國は夫々特有の指導原理をもつており、自由主義・民主主義・共產主義・ファツシズム・ナチズムの如きはそれ



である。而してかゝる指導原理は他國に影響を與へるものであり、そこに種々の形に於いて思想上の争闘が生ずる、この争闘が所謂「平時の思想戦」である。

これらの思想は單に國家觀・人生觀・世界觀のみならず、又、政治經濟・文藝言語・宗教・道德教育・自然科學等々凡ゆる學說思想となつて表現せられてゐるのであつて、ある時は人道主義・平和主義・文化主義・國際主義等の人類普遍の眞理の名をかりて現はれ、或は専門的純理論的な學問體系の形を以つて現はれる。

一國の思想が他國に或は抵抗をうけ或は無抵抗に侵入する際は、國民の思想内容を混亂せしむると同時に、思想の潮流として集團的な雰圍氣を醸成して行き、被侵入國民は、單に侵入國の國柄指導原理・生活様式等に好意好感を持つ程度から、進んでその侵入國を「我等の祖國なり」と信ずることになる場合すらある。これは宗

教に於いても時々見受ける。特に新奇で興味をひく思想が侵入すれば、各方面に強力な反響を及ぼし、國民の思想信念の動搖・道義の弛緩・風紀の頹廢等が起る。思想戦の攻撃國は遙か遠隔の地にあらうとも、その戦ひはここでは國內であり、戦ひの形態は各人の精神内容の分裂と個人乃至集團の思想對立とであつて、實に國民を分裂背反せしめ國家をも危殆に陥れるのである。嘗てわが國に社會主義・共產主義の侵入した場合に、國民思想は混亂し所謂思想國難を見たのであつた。高度國防國家體制の完成を必要とする今日、一億一心・大政翼贊の肇國の大精神に透徹し、之に背反し逸脱する思想は速に克服清算されねばならない。

## 二、思想戦の闘争手段

前歐洲大戰に於いて英國側の得たる勝利は、思想戦の威力特に



宣傳の効果を最も如實に示したものといはれ、英國の情報省が内外の通信報道を統轄して、世界中に撒布した文書の類は夥しい數量に上る。武力戦に於いて壓倒的に躍進してゐたドイツも、此の宣傳戦に敗北を續け、前線銃後の弛緩に加ふるに共産主義の侵入となり、それに食糧難も累加して、遂に敗戦の苦汁を嘗めた。かかる苦き經驗は、ナチズムを指導原理とする復興ドイツに於いて尊き自己批判の材料となり、或は外國情勢を徹底的に調査し、更に逸早く啓發宣傳省を設けて新聞雜誌ラヂオ演劇映畫等の各種の部門を統轄し、國策の下に内外統合して啓發宣傳を行つてゐるが、最近の大戦記録映畫、勝利の歴史の成功はその一端を物語るものである。

今次の大戦が勃發するや、一時縮少された英國の情報宣傳機關も直ちに情報省として復活し、政府發表並に諸種の宣傳報道を統轄して盛に活動を續けてゐる。イタリヤやソ聯も、此の方面では古くから機構の統一整備を圖つて居り、米國も政府情報部を新設し、フランス・カナダ其他各國とも機構を整備してゐない所は少い。

かくの如く、世界各國何れも思想戦の闘争機關闘争手段を積極的に整備組織化せんとしてゐるが、今この思想戦を闘争手段の面から見るならば、諜報・宣傳・謀略の三つに大別せられる。

諜報とは、相手國の政治・經濟・文化その他萬般の國內情勢、特に國民の結束状態、國民性、長所缺點等を知悉し、その弱點又は苦痛とする所に對し有效適切な攻撃を加へんがため、種々の資料・情報を蒐集することである。それがため各國は常時より凡ゆる資料に基づいて研究調査を遂げると共に、戦時事變に際しては特に、軍機・資源・秘密・總動員・機密等に關して探知収集を行ふ。此の戦時事變の



際に敵性國を相手として注目すべき活動をなすものに所謂諜報機關(スパイ)があつて、或は合法的手段を以つて或は陰密の間に恐るべき機密を獲得し去る。それも特別に窃盜行爲をなさずとも、普通のありふれた文書・寫眞・地圖等から幾らでも諜報を取り得るのである。最近我が國に於いて發覺檢舉せられた外國諜報網の全貌は、今更ながらまざまざと我々を戰慄せしむるものがあつた。かかる諜報によつて得らるる幾多の資料及び日頃の研究調査を綜合して、自國の總力戰發動の基礎を固め、又時宜に適した宣傳戰・謀略戦が行はれるのである。

宣傳とは、自國の目的達成のために或種の事實を普く傳へ理解と共鳴とを求めんとすることであつて、内に精神的團結を愈固くし、外には自國の目的意志を浸透せしむる手段としては最高の意義を有するものである。先に述べた戰時事變に於ける各種の思

想戦、本來の思想戦の何れに於いても宣傳を通じての思想戦が最も主要な位置を占めてゐる。しかし宣傳といつても文書・ビラ・ポスター・新聞雜誌・口頭・ラヂオ・政治・經濟・映畫・演劇・文藝・言語・宗教・學術・教育等凡ゆる方法に互り頗る多種多様である。然も平時たると戰時たるとを問はないのであるが、特に戰時事變中にあつては、非義道的なデマ宣傳・謀略宣傳によつて偏見と錯覺とを生ぜしめんとする場合が多々あるから嚴重な警戒を必要とする。現在、重慶政府や敵性諸國が我が國に關して發表する宣傳は、多くはかかる謀略宣傳と見てよいのであつて、従つて我が國民は、我が政府諸機關の發表を信頼して、事態の真相を把握すればよいのである。かかる宣傳と趣を異にし、相手國の要所を狙つて直接的に危害破壊を加へる行動乃至言動が謀略であつて、これは鐵橋を爆破し、工場に放火し、要路の大官の暗殺を圖り、罷業・怠業・反亂等を煽動す



る。最近發覺した滿洲國內に於ける重要建築物その他の破壊陰謀、我が國內に起つたマツチの買占めによる經濟攪亂の謀略等、例示すれば相當にある。かかる陰險極まる突發的策謀によつて、治安を紊し國內不安を惹起して思想的、精神的結束を崩壊せしめるのは、矢張りスパイ第五列の主要任務に屬してゐる。

右に述べた各種思想戦の闘争手段に對する防衛が即ち防諜である。我が國では未だ防諜觀念が不足してゐて、防衛方面は遺憾ながら尙相當の缺陷を藏してゐる。それは、國民全部が一人々々事實上機密を分擔して居り、逆にいへば他國の狙ふ諜報の對象を國民一人々々が持つてゐるといふ點に關し國民の注意が尙十分でないからである。

### 三、思想戦と國民の心構

我が國に於いては現在國內機構を刷新し高度國防國家體制の完成に邁進してゐるが、政治・經濟・文化・科學・厚生等は謂ふに及ばず、國民學校創設を發足とする教學刷新の教育新體制、大政翼賛會を中心とする一億一心の國民生活體制等凡てこれらの鞏固なる統合そのものが思想戦の機構である。

従つて直接に思想戦機構として考へる場合にも、舉國新體制確立のための核心たる國民精神の一新昂揚が根柢にあるのであつて、歴代内閣は一様にこれを根本問題となし、政綱政策に表明してゐるが、最近の新體制確立に伴ひ愈、これが機構の統一的整備と強力なる運営とがなされることとなつた。

國民の思想態勢を整備するためには國民がよく國體の本義に透徹し、日常生活の上にそれを具現することが第一義であつて、教育學問がその根本的原動力となる。かゝることは文部省延いて



は各學校の日常の責務であつて、教育の大任の重大なること今日に如くものはない。尙特に治安維持法違反の取締りとしては内務省、司法省が之に當り、防諜取締のために軍機保護法、軍用資源秘密保護法等の軍關係取締法、それに國家總動員法、最近施行せられた國防保安法等の法律であり、流言蜚語の取締のためには警察犯處罰令、戰時特別法等に各關係條項が存する。尙戰場を中心とする思想戦は軍が直接これを統轄してゐるが、外國の宣傳謀略を克服し内外の出版、報道、啓發、宣傳等の方面を統一的に管轄指導する機構として情報局がある。

以上の政府の諸機關により、諸對策が中央と地方とに行はれ、國民思想の強化が完成する所に高度國防國家體制の確立が約束せられる。思想對策研究會は昭和十四年に各道府縣に設置せられ、思想の嚮導きやうだう、國民思想の昂揚に關する諸種の具體的方策を實施し

てゐる。しかし思想戦態勢はひとり官のみでは萬全を期し得らるるものではなく、國民が齊しくそれに一致協力しなければならぬのであつて、その意味より次に國民各自の思想戦に對する心構を記して置かう。

(一) 國體の本義に透徹すること 我が國は肇國の大精神たる八紘爲宇の聖業達成のために、今や内に舉國一致盡忠報國の體制を愈々確立して、大東亞共榮圈の建設、延いては世界新秩序の形成に邁進してゐる。實にこれこそ曠古の大業であり、新らしき國生みである。これがためには支那事變勃發以來、累次下し賜はつた大詔を奉體し、國民舉つて皇國に生き皇國のために死するの覺悟を固くせねばならない。承諾必謹、國策の指向する所に國民は勇躍挺身ていしんし、日々の生活行動の中にこれを具現して行かなくてはならない。これこそ現在に於いて國體の本義に透徹する所以である。



(二) 國策には絶対に随順協力すること 戦時に兎角あり勝ちな不足不便に對して、不平は絶対にいはないようにしなければならぬ。戦時國策遂行の途上に於いては、不平不満をブツブツいふのが一番支障になる。我が國は今往くべき唯一の道を進んでゐるのであるから、物資經濟方面のみならず外交内政問題に關しても、銘々勝手な議論で時間を浪費するよりは、皆で一緒に打開しようとの決意を固めねばならぬのであつて、そうしなければ早く打開出来る難局もずつと遅くなつてしまふ。政府の施策に積極的に協力して、その上に自分の生活を盛立てて行くのが最上の道である。

(三) 職域奉公 軍官民各、分擔があり職域に於いても持場々々がある。各自は國策の命ずるところ最良の持場を守り通し、凡てが職域奉公の一心によつて貫かれてゐなければならぬ。然も思想戦やその中の防諜上に必須な法律や職域内規定に關しては、單に

それを守るといふだけではなく、進んでその制定せられた趣旨精神に則つて行動を律しなければならぬ。

(四) 生活の刷新 自分の身の廻りを反省して見ると、今迄氣がつかなかつたことで改善すべきことが驚く程澤山ある。衣食住を始め勤勞態度、餘暇活用、國民相互の交際の問題、其の他凡ての日常生活を國是國策に沿ふやうに統一し、明るく健全で無駄のない生活をして行かなければならぬ。そうすれば物資も節約せられ能率も増進し、國民相携へ清新な空氣で銃後國民生活を固めて行くことが出来る。

(五) 必勝の信念 日清、日露の役を通じ當時の大強國と謳はれた諸國を撃破して東洋平和の基礎を確立し得たのは何の賜物であるか。將又、今次支那事變勃發以來の長期建設戦に於いて輝かしき成果を收めつつあるのは何に依るか。即ち皇軍の作戦の妙、日頃



の猛訓練もさることながら畢竟御稜威の下、國民一丸となつて凡ゆる辛苦を乗越え、大和魂による必勝不敗の信念を根柢に堅持するからである。各員部署を守り通して死すとも止まじ、勝たずは止まじの不動の信念の必要なこと、銃後國民の實際生活上に於いても些かも變りはない。日常の生活を職域に於いて家庭に於いて建て直し、強健なる身體と優れた技能及び献身奉公の精神を以つて國家目的を負荷擔任し、必ず勝つといふ確乎不拔の信念を持して、憂事のなほこの上に積れかし限りある身の力ためさんといふ氣魄を以つて凡ゆる困苦辛酸を克服しなければならぬ。

(六) 困苦缺乏に堪へること 現在にあつては國家の凡ゆる活動は戰爭目的に統一せられ、國民の日常生活も以前のやうな贅澤で放漫な状態は許されない。不足不便なのが戦時の普通の状態であつて、ドイツでもイタリーでもソ聯でも英國でも皆苦しい所を我

慢してゐる。なくても済まされるものは済まし、代用品を工夫活用し、少々位寒くてもひもじくても堪へ忍び、一里や二里は徒歩で事足りる。第一線將兵の勞苦を考へれば銃後の困苦など問題にならない。

(七) 言動に注意すること 我が國是國策の上に日常生活を統一するためには、不用意不注意無責任な言動は絶対に避けねばならない。何でもないと思つたことでも親兄弟に、同僚に、近隣に、不知不識の裡に大きな雰圍氣を作つてしまふことになる。頽廢的な空氣を作つたり流言蜚語となるのもそこだし、スパイに附け入れられるのもそこである。それに更に重大なことは、各人が夫々の言動を矛盾なく統一的にするといふことである。朝に神詣りして夕に闇取引しては何にもならない。家庭では親和を圖り屋外ではいがみ合ひ、獨りの時と家庭内と職場と世間とでは矛盾したこと



をやつてゐるやうでは、一億一心も和衷協同もなく、思想戰攻撃の矢は容易くあたる。最善最上と思ふことは何時如何なるときに於いても斷行しなければならぬ。

時局讀本終

昭和十七年三月十五日印刷  
昭和十七年三月二十日發行

不許  
複製

時局讀本(第二輯)  
定價金四十錢

著者 北海道廳

發行者 札幌市北一條西五丁目一番地  
社団法人 北海道聯合教育會  
代表者 大西正一

印刷者 札幌市北一條西三丁目二番地  
合名會社 文榮堂印刷所  
代表者 山中次郎

發行所 札幌市北一條西五丁目  
電話 四三四番  
社団法人 北海道聯合教育會  
振替口座小樽七四四九番

日本出版文化協會會員番號二三〇〇八

配給元 日本出版株式會社  
東京市神田區路二丁目九番地



419

206

1874

1874

1874

1874



終

